座間市文化財調査報告第六

座間の湧水

座間市教育委員会

序

座間市教育委員会　　教育長　野島　正

ここに座間市文化財調査報告第六　座間の湧水　を刊行いたします。

湧水は座間市に取っては特に大切なもので、市民が毎日「うまい、うまい」と言いながら飲んでいる水道の水は、大部分栗原地域の湧水を汲み上げたものです。また市役所の所在地は通称「鈴鹿」でありますが、この「鈴鹿」というのは「清水＝湧水のある所」という意味です。市役所近傍には何箇所もの湧水があり、それによって地名が発生し、その湧水を頼って集落ができ、しだいに村の中心部として発展して、やがて村役場が設置され、現在に至ったもので、いわば市役所も湧水によって作られたようなものであります。栗原方面も事情は同じで、この湧水を頼って、一万七、八千年前の人が住んだ跡もあり、やはり目久尻川や芹沢川の谷には湧水によって集落が形成されてきたものであります。

しかし、このように貴重な市内の湧水も、従来まとまった調査がされておりませんでした。そこで当委員会は昭和五十四年度に、市文化財調査員等の方々にお願いし、その調査を行い、その結果を本書にまとめました。

本書をお読み下されば御理解いただけると思いますが、自然現象とみられる湧水も、人の手によって作られた文化財と同様、成り行き委せでは、容易に傷つき滅びてしまうものであります。今後、美しく住み良い市を建設してゆく上に、湧水は極めて重要な役割りを持つものと思われます。本書が市民各位の湧水へ対する御理解を深める一助となれば幸であります。

終わりに、この調査に多大の御協力を賜った各位、調査執筆に当られた市文化財調査員等の方々、本書の監修および編集をされました市文化財保護委員会に対し、厚く御礼を申し上げます。

昭和五十六年三月一日

序　座間市教育委員会　教育長　野島　正

はじめに …… 1
座間市湧水分布図 …… 2
一、泉水（せんすい）の湧水 …… 小俣国栄 …… 4
二、番神水（ばんじんすい） …… 小俣国栄 …… 10
三、吉川の泉 …… 小俣国栄 …… 15
四、竜源院及び心岩寺の湧水 …… 赤石智子 …… 17
五、神井戸（かめいど）・その他 …… 井上収一・大谷之彦 …… 26
六、小池・蟹ケ沢の湧水 …… 鈴木芳夫 …… 32
七、上栗原の湧水 …… 井上収一 …… 37
八、報告前記 …… 見上昭二 …… 41
九、芹沢の湧水 …… 見上昭二 …… 44
十、いつぺ窪の湧水 …… 見上昭二 …… 52
十一、大下（おおしも）の湧水 …… 見上昭二 …… 58
十二、文祖（ぶんそ）の湧水・その他 …… 鈴木芳夫 …… 62
おわりに …… 66

題字　野島　正　写真　編集者

はじめに

市内には湧水が多い。それらは座間基地西端から小田急線座間駅西方へ続く相模野台地西縁の崖下と、栗原方面の相模野台地を刻んでいる目久尻川とその支流の芹沢川の谷とに分布している。これらは共に相模野台地下に広がっている砂礫層の中より湧出するものであり、そのおよその所在地は次頁の地図の通りである。

今回の調査で取り上げたのは、それらのうちの主要なもので、中には現在湧出の止ってしまったものもあるが、古来多くの人々に親しまれていて知名なものは取り上げた。

これらのほか湧水地は座間の中河原西側の清水（しみず）、同河原宿南方の牛池（うしいけ）、新田宿の専念寺墓地の西側、入谷の桜田地域の水田中、などにもあったが、これらは桜田地域を除き、みな相模川の旧河道に湧いていたもので、清水は大正十二年（一九二三）の関東大地震以後は消え失せてしまい、牛池と専念寺墓地西側は相模川の水位が砂利採取のために低下したのにつれて、昭和三十年前後に枯れてしまった。桜田地域は耕地整理や周辺の開発により、現在は滲む程度で、地点は特定できない。

また入谷の大坊谷戸と中羽根沢などにも多少の湧水はあるが、これはいわゆる「しぼれ水」で、季節によっては枯れることもあり、量は少い。

現在の明王（旧明王谷）、緑ヶ丘の小田急線西側（旧狢谷戸）、上羽根沢（現東建ハイツ）、立野台の公園のある低地、下栗原のヤマサキ、などにも「しぼれ水」が湧いていたが、これらはみな宅地造成などのため地形が変化して、今は全く跡形もなく、僅かに立野台公園に池が残っているだけである。

栗原方面でも、この報告書に取り上げたもののほか、水田の中や崖下の各所に湧水があったが、それらの多くは現在は枯れたり埋め立てられてしまっている。

これらの湧水について、特に調査しなかったものは、分布図に記入しただけに止める。

分　布　図

—

下タ—

保—

—

(衛門沢—)

37. ✡○　座間基地上栗原東水源地（上谷東—）
38. ✡○　座間基地上栗原西水源地（上谷西—）
39. ✡○　座間基地西老場（ろうば）第一水源地
40. ✡○　座間基地西老場第二水源地
41.　×　東老場北（かめの子山）—
42. ✡○●市水道第二水源池（東老場南—）
43. ✡×　沖芹沢東—
44. ✡×　沖芹沢南—
45. ✡○　沖芹沢西—
46. ✡○●市水道栗原水源池
47. ✡×　中芹沢一号—
48. ✡×　中芹沢二号—
49. ✡×　中芹沢三号—
50. ✡×　中芹沢四号—
51. ✡×　中芹沢五号—
52. ✡○●市水道第一水源池
53. ✡×　下芹沢—
54. ✡×　宮の前—
55. ✡○●文祖（ぶんそ）の清水
56. ✡○●建具（たてご）屋の泉
57. ✡○●萱場（かやば）の泉
58.　×　やまさき—
59. ✡○　いつぺ窪東(A)—
60. ✡○　いつぺ窪西(B)—
61. ✡○　いつぺ窪南(C)—
62. ✡○　大下（おおしも）—

座間市文化財保護委員会

座　間　市　湧　水

凡　　例

○　現在常時湧出している湧水（水道水源も含む）湧水の文字は――　で表す。
⌓　現在季節によって湧出する湧水
×　現在は消失また止まってしまっている湧水
✡　本書に取り上げた湧水
●　現在定まっている固有名称。その他は仮称で、今回他と区別するために付けたもの。主として所在地の小字を用いたが、わかり易いように通称を用いたものもある。
注　座間基地水道の水源は「地」であり、市水道の水源は「池」である。

附図例言

1. 本書の附図は湧水分布図の部分拡大図であるが、宅地造成等により地形が変化し、中には全く消失してしまった湧水もあるので、以前の状況の証拠を示す意味も兼ねて掲示するものである。
2. 附図の原図は昭和３年および同３７年発行の地籍図である。
3. 特別の指定がない限り、方向は上方が北で、縮尺は二千四百分の一をさらに二分一に縮小したものである。
4. 図中太い黒線が水路（川）で、その行き止りになった先端付近に湧水が多い。
5. 図中の各湧水に付けた番号は分布図の番号と一致している。

1.　×　清水（しみず）――
2.　×　専念寺（せんねんじ）裏――
3.　×　牛池（うしいけ）――
4. ✡×●泉水（せんずい）上（かみ）の池
5. ✡×●泉水下（しも）の池
6. ✡×●泉水山の井戸
7. ✡○●番神水（ばんじんすい）
8. ✡○●吉川（よしかわ）の泉
9. ✡○　竜源院（りゅげんいん）――
10. ✡○　心岩寺（しんがんじ）――
11.　×　鈴鹿――
12.　×　諏訪の前――
13. ✡×　梨の木坂
14. ✡○●神井戸（かめいど）
15.　×　根下（ねした）北――
16. ✡⌓　根下南――
17.　○●星野家用水
18. ✡×　入り――
19. ✡×　原の北――
20. ✡×　原の南――
21.　×　狢（むじな）谷戸
22.　×　明王谷――
23.　⌓　沖の谷戸――
24.　⌓　大坊谷戸――
25.　×　庚申（こうしん）
26.　×　上羽根沢――
27.　×　狼（おおかみ）久
28.　⌓　中羽根沢――
29.　⌓　長久保（立野台）
30. ✡×●小池
31. ✡×　小池南――
32. ✡×　蟹ヶ沢――
33. ✡×　後ろ谷戸――
34. ✡○●市水道第三水源池
35. ✡⌓　入りの谷戸上――
36. ✡⌓　入りの谷下――

昭和５６年２月４日　作成

一、泉水の湧水

小俣国栄

所在地

④上の池　座間一丁目三四三六番地

⑤下の池　同　三三九六番地

⑥山の井戸　同　三六六四番地

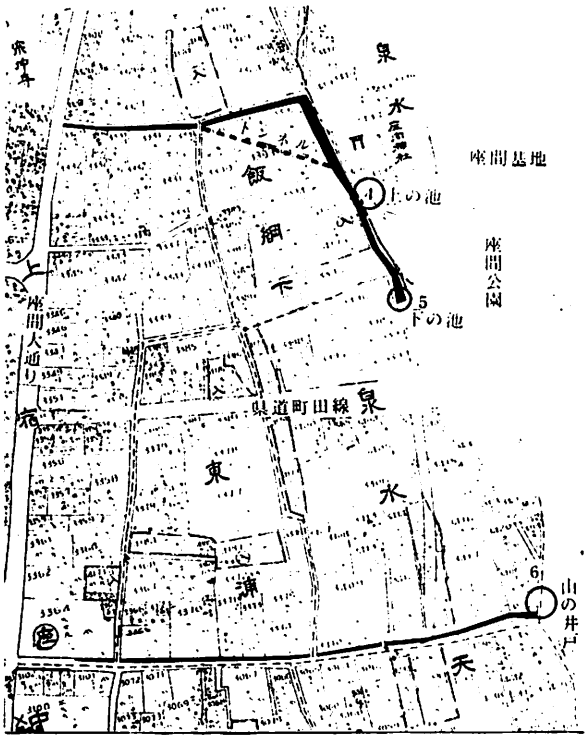
座間神社の西南、今の座間公園の麓には、昔から自然に湧出していた泉が、上宿地区に二ヶ所、中宿地区に一ヶ所あって、これらの湧水は共に地元の人達にとっては、日常生活に最も必要な生活用水であっただけでなく、大切な防火用水としても大変重要な水源であったのである。

この座間公園の一帯は字名を「泉水＝せんずい」というところからみても、昔この地域に人が住みついた頃から、既にこの三ヶ所からは相当豊富に清水が湧出していたものと想像出来るのである。

上宿の二ヶ所の湧水については地元の人達は「上の池」「下の池」と呼んでいた。

昔はこの二つの泉は合流をし、真西の方向に自然の地形に従って作られていた水路によって、糀屋百貨店の北側付近で、座間大通りに流れ出るようになっていたと言われる。

第1図　泉水の湧水

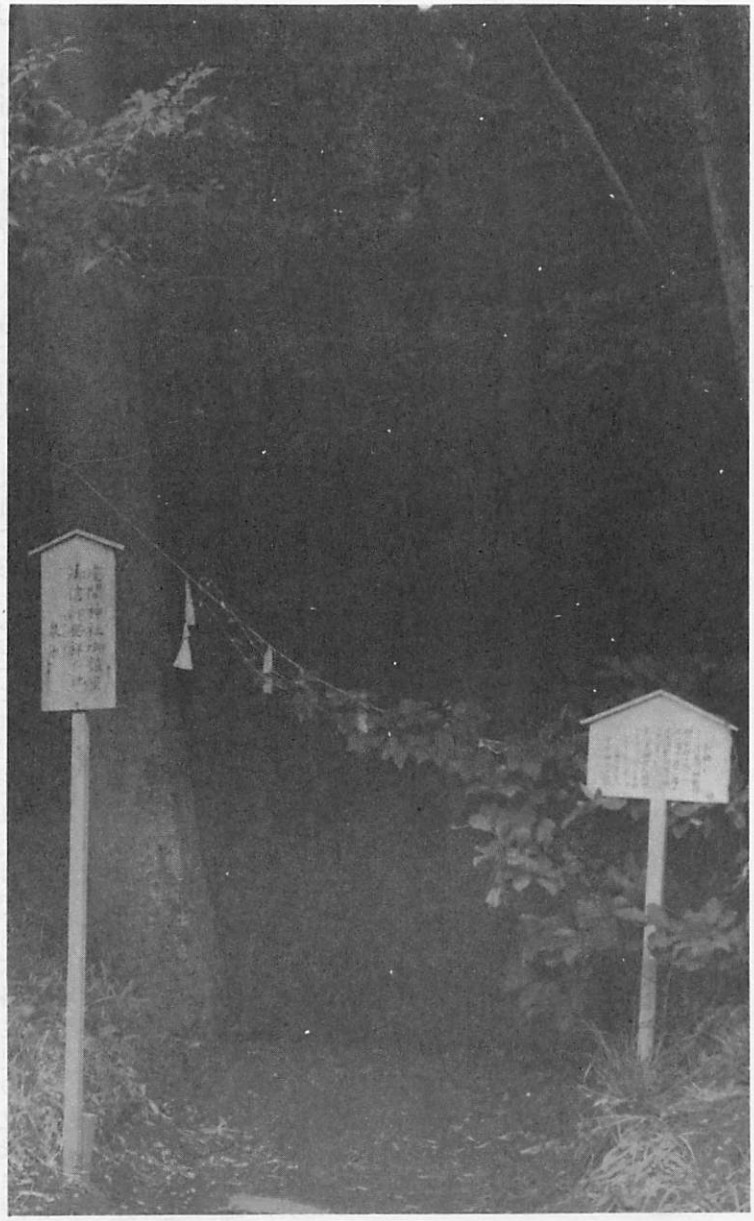


しかしこの水路は、江戸時代末（年代不詳）に、全く別の方向に新らしく水路を作った為に、不用となって埋立てられてしまったが、その痕跡の一部は現在でも確認出来ると、地元の古老は語り伝えている。

さて、新設された水路は「上の池」の流出口付近から、神社の石段の手前を北に抜けて、山麓を更に真北の方向に、地形的には全く逆流ではないかと思はれるような深い掘割りによって迂回させ、飯綱坂下の道路に接する所で、西方に左折し南側の深い掘割りを通路添いに流れて、加藤商店の南側で表通りに出るようにしたものであった。

このような水路の変更新設については、この発案者は誰であったのか、又この案に対して当時は可成りの論議があったが、工事を強行したという話が、一部の地元の古老に伝えられている。しかし、ここではそれには触れないこととする。

とにかくこの湧水は、上流付近約十二、三世帯の日常の貴重な生活用水であったばかりでなく、上宿町内にとっても又非常に大切な防火用水でもあった訳で、そうした観点からすれ



泉水・上の池跡
今は全く埋れていて、立札がなければ気付かない　55.7撮

ば、従前より水路が大幅に町内の北部に移ったことは、それだけでも水路変更の立派な理由の一つであったというべきであろう。

一般の人の考えからは随分飛躍したような計画によって工事が強行されたというこの迂回水路も、勾配の関係で飯綱坂下の左折する付近では、道路面と水路とでは、三米以上も高低差があったため、この付近の道路は非常に危険な区域となっていた。農作物等を満載して坂を下りて来る勢のついた荷車が、右に急曲りしている道路を曲りきれずに直進して、そのまま掘割りの深い水路に転落するという事故が度々起るので、町内にとっては大変厄介な問題の水路であったという。

そこで上宿町内の人達によって、このような危険を除く方法を色々検討協議の末、次のような水路の大改良工事を行なうことになり明治四十五年に実施をされたのである。

この工事は「上の池」の流出口付近から、西北方向に、今の波多野家の前方の水路までの区間に直線の「トンネル」を掘り、従来の迂回水路に代えて通水をする計画で、この大きな土木作業は、地元上宿の人で「稲垣好太郎」「同峯春」という親子が請負の責任者となり、町内多数の人々の協力によって行なわれたのである。

工事に要した労力、期間、経費などは調べてもわからなかったが、幅三尺（〇・九メートル）高さ五・八尺（一・七メートル）総延長約五十間（九十メートル）の立派な地下導水路が完成をしたのである。通水されると同時に従来の危険な迂回水路は不用となり、直ちに埋立てられてしまった。

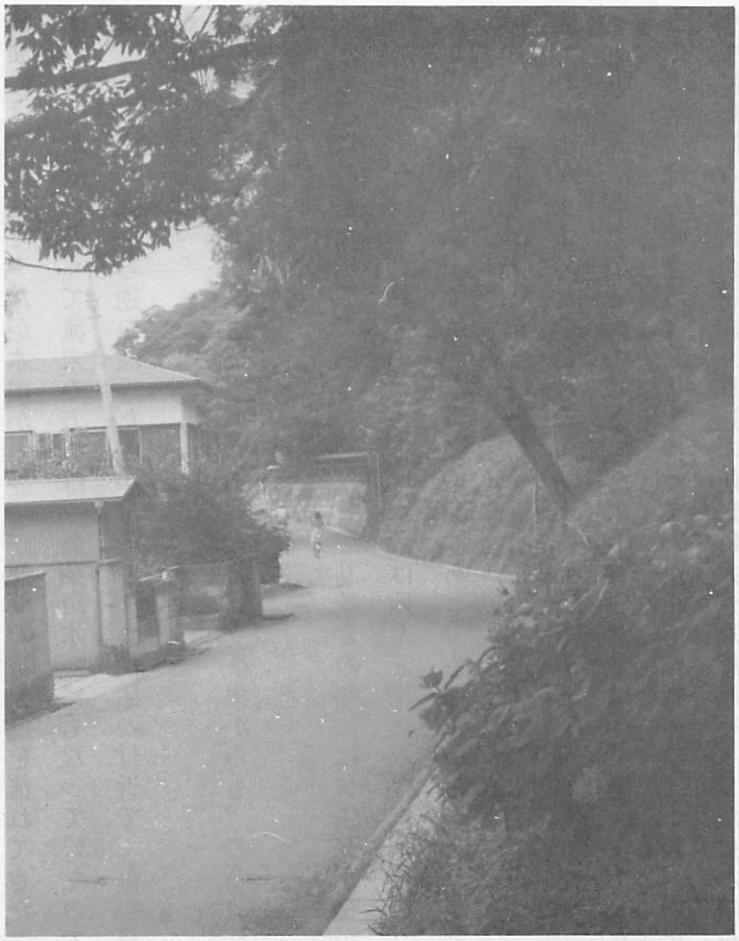
聞くところによると、この工事の責任者であった故稲垣氏は、父子共に生来大変に器用な人だったという。しかし農業が専業だったので、土木関係の工事については特に専門的な知識経験は全く有していない素人（しろうと）であったという。従ってこんなむずかしいトンネル工事を行なうに当っても、正規の測量機械などは一切使用せずに、作業を進められたということである。

工事の方法は、上下両方の予定した出入口から「方向」と「勾配」を定め、手掘りにより順次掘り進め、最後に双方からの接続点では、上下の段差僅かに五寸（十五センチ）左右は寸分の誤差もなく貫通させることが出来たという。真に奇跡

と言われる程の大成功で、適確だった工法や、専門家に比べて決して遜色のない、卓越した技量に対しては只々驚嘆、敬服の外はない次第である。

素人の指導でこんなに大きな「トンネル」の掘削工事が七十年も前に上宿地内に完成し、これによって町内が恩恵を受けていたことを今でも知っている者は、地元の老人以外には殆んどなく、しかも今は全く不用となっているため、世間からは忘れ去られようとしている。

さてこの「トンネル」を抜けて出てくる清水は、前にも触れた通り、周辺の家々にとっては、日常生活上必要な飲料水をはじめ、総べての生活用水として一日も欠かすことの出来ない誠に貴重なもので、水量が極度に減少してきた昭和十三年頃までは、井戸水に代る大切な用水として利用されていた。上流付近では各家々の前の川に堰を作り、深い水溜りが出来るように板囲いをした洗い場が設けてあり、そこに炊事用具や食器類が漬けて（ふやかすといった）あるのを何度か筆者も見た記憶がある。その他現在の十字路付近以北の表通りに面した家では、飲料用以外の一般家庭用水として、随分広い範囲で重宝にこの水を利用していた。



泉水・下の池の跡　泉はこの辺から道路の方向（上方）へ流出していた。右側は座間公園　55.7撮

昭和の初め頃まで、座間小学校の西側の

油面には、僅かだったが水田があって、座間の宿通りを流れてきたこの泉水の水を使って水田の耕作が行なわれていた。その頃は水量も多くて流末の方では「農業用水」にもなっていたのである。

この下流の方から逆のぼった鰻が上流の加藤商店の付近で、毎年夏になると多量に取れたということを、実際の体験者が語っている。

以前にはこのように魚が生息していたという事実からも、この流れが下流の方でも、どれほどきれいなものであったかが想像されるのである。

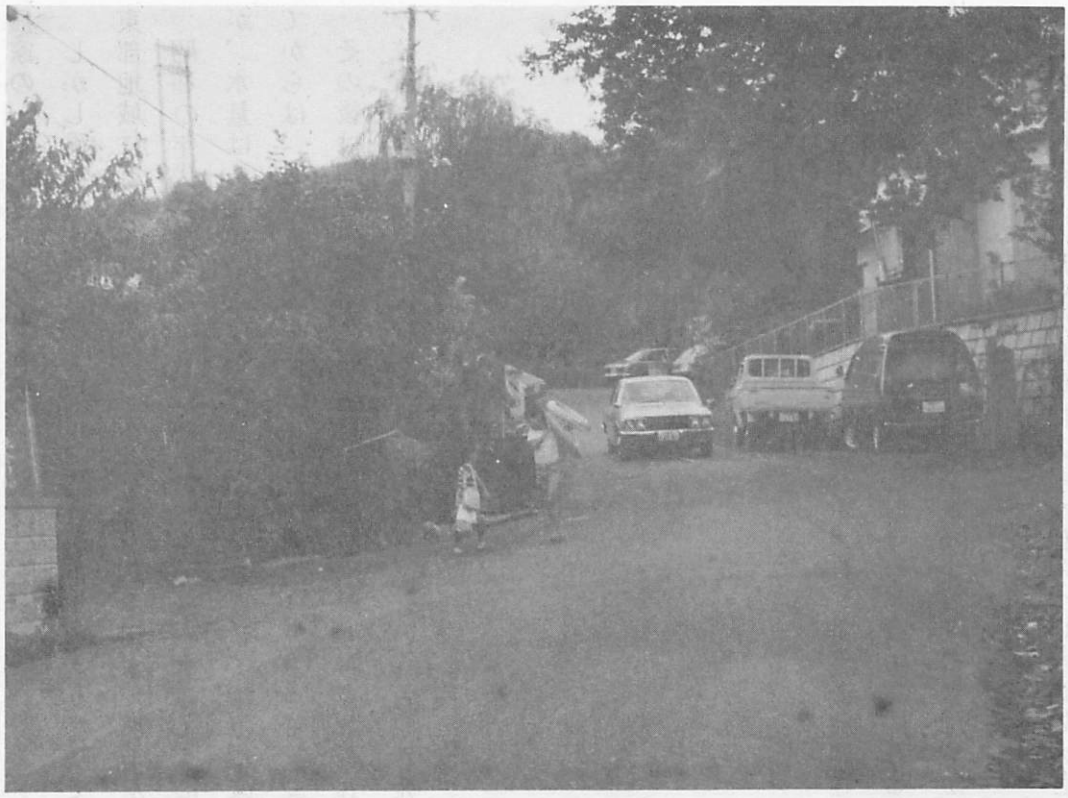
どんなに豊富な水源であっても、日照り続きの年には矢張り水量が減るので、こんな時は水源を掘り広げたことも何度かあったそうだが、異常渇水の年は水量は殆んど増えなかったという。

こうして年によっては湧出量に増減はあっても、昔から絶えることなく「こんこん」と湧き続けた泉も、昭和十二年に陸軍士官学校が移転し、台上一帯が急速に開発されたのに伴って、二つの泉は急激に湧出量が減退しはじめ、先ず「下の池」の湧出が止まったのに続き、「上の池」も著しく減水し、地元では防火用水を確保する必要から、水源の再掘を行なったが、既に水脈が枯れてしまったものか、水量は全く増えなかったという。

こうしてほんの僅かな湧水を続けていた泉も、戦後の二十五、六年の冬季渇水期頃から全く湧出は止まってしまった。曽ては豊富な湧出量を誇り周辺の住民に大きな恩恵を与えた泉水の泉も、遂にその湧水の長い歴史を閉じたのである。

さてこの泉の現状は「上の池」には入口に注連縄が張られ、「神社信仰発祥の地」と記した立札が、座間神社々務所により立てられており、湧出口をはじめ周辺は自然に土砂で埋まってしまったが、形態は概ね以前のままで保存されている。一方「下の池」は今の井上家前方の山麓にあったが、昭和四十五年頃にこの付近に道路が新設される時、湧水跡地もその一部が用地となり、付近一帯は埋立て整地されてしまったので、池の跡地は再び見ることは出来ない。後述の中宿の「山の井戸」と同様に「下の池」は今は「幻の泉」となってしまった。

次に「トンネル」の現状は、上流の入口付近が埋立てられた以外は以前の形で残っているが、途中で何ヶ所か、民家の



泉水・山の井戸の跡　中央の子供の左側の生垣のあたりで谷川に流れ出ていた。谷川は2メートルくらい低かった。道路前方は座間公園入口　55.7撮

下水が流入するようになったので、今では地下下水溝に変り果ててしまった。下流の出口のところで側溝に埋設されている大きな排水管に接続している為、今では「トンネル」の内部を検分することは残念ながら殆んど不可能である。

本稿の主題である「湧水」についての記事の中に「トンネル工事」のことを書いたのはいささか場違いのようだが、この湧水に関する限り、常時住民が利用した大切な生活用水の導水路として、この「トンネル」は、どうしても切り離すことは出来ない関係にあったからである。更に今まで言い伝えの外には公表されていないように思われる「トンネル工事」に関する主な内容を、この機会に特に書き加えて置くことが必要であると考えたからで、将来これが何かの参考にでもなることがあれば、筆者の大きな喜びである。

さて、第三の湧水の中宿の分は、通称「山の井戸」と言われ、泉水地域の最南端部にあって、湧出してから僅か十数メートルの流れで、地形上すぐ下の谷戸川に合流するようになっていた。そのためこの湧水を日常の生活用水として利用していたのは、隣接していた

農家の一軒だけであったという。

しかし異常渇水時に、谷戸川の流れが止まるような時でも、この湧水は、極端に減水することがなかったので、中宿の東部地域にとっては昔から、大変重要な防火用水であったと言われている。

昭和の年代になってから、湧出量が年々減少するようになり、地域の人達によって、三回程掘り下げ作業が行なわれたが、水量は一向に増えなかったという。こうして年毎に減水を続けた泉は、十二年に台上一帯が陸軍士官学校用地となってからは、急激に水脈が枯れて、遂に湧出は止まってしまった。

その後は周辺の宅地開発に伴い、以前水源であった所も、下の谷戸川の部分も、すっかり埋め立て整地されて、今はその位置さえも確認出来ない。「山の井戸」という名前さえ既に忘れられようとしている「幻の泉」となってしまった。

二、番　神　水

小　俣　国　栄

所在地　⑦入谷一丁目三二四五番地

水温　十七・八～十八・〇度

湧水量　毎秒〇・〇〇五㎥　日量四三二㎥

（昭和五十二年一月四日　同三月十六日　市水道部調査）

番神水は入谷長宿部落の北部、円教寺の東裏山麓にある湧泉である。「番神水」と言うのは、「番神堂」という円教寺によって管理されている小さな祠があって、その敷地内から湧き出ている清水であるところから名付けたものだろうと言い伝えている。

この泉は恐らく周辺の地域に人々が住みついた遠い大昔の頃から、長い年月に亘って、代々の住民が大切な生活用水と

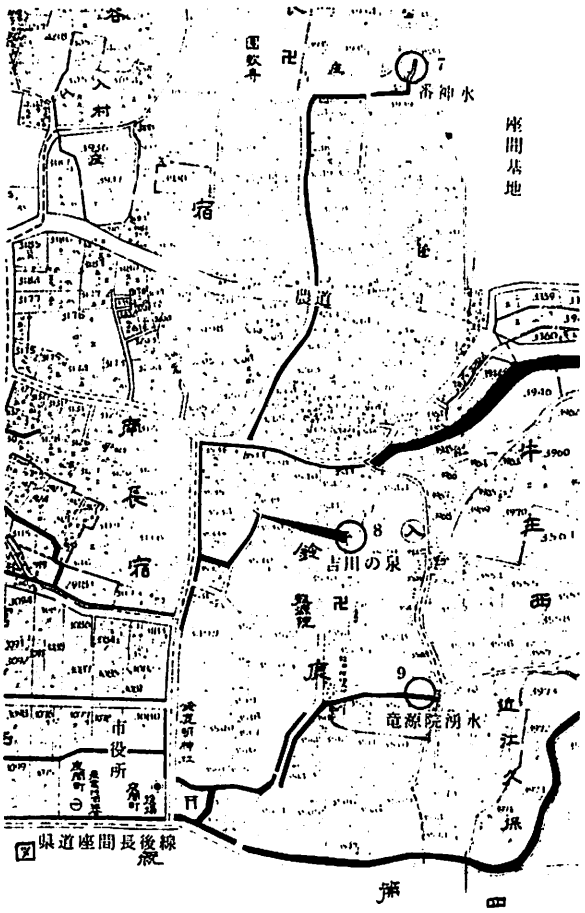
して、利用し続けてきたものと思われる。

そして明治から大正の時代になってからも、流域に当る長宿通りの大部分の二十世帯程の家では、昔から引続いて、井戸水の代りにこの豊富な湧水を、大変貴重な生活用水として利用していたのである。

さてこの水の利用について、各家庭で炊事専用に使う水だけは、夫々各戸毎に、特に水源まで毎日何回も、汲みに通ったものだという。この水汲み作業は、水源で二つの手桶に汲んだ水を、水汲み専用の鉤の付いた小形の天秤棒で、かついで自宅に運び、炊事場備え付けの水甕に汲み入れたという。

この作業は主として、各家庭の主婦達によって行なわれていた重要な日課の一つで、他の仕事と異って、この水汲みに関する限り、盆も正月もなく、又どんなに悪天候の時でも、一日も休むことが出来ず、全く年中無休の大切な仕事で、水源まで二百メートル以上離れた遠い家もあり、主婦にとっては、ほんとうに大変な重労働であったと言い伝えている。

第2図　番神水・吉川の泉・竜源院湧水



大正の中頃まで長い間続いていた水汲み作業を、なんとか改善しようと考案されたのが専用の土管を敷設して給水する方法であった。

この新らしい給水施設は、水源の所から直接取り入れる水を、川の片側に添って流末近くまで敷設した土管（径十五センチ）に導いて流し、途中各戸又は共同で作った何箇所かの川端（堰を作り一部分川底を深くした洗い場）毎に、必要な時はいつでも自由に開閉できる止水装置を設け、その調節に

番神水　湧水箇所　55.7撮

よって、土管の横穴から飲料用水が直接取水出来るようにしたもので、極めて簡単な「簡易水道」のようなものであったという。

湧水の利用者が共同で、このような給水施設を作ったことによって、各家庭では飲料用水が庭先きの川端で容易に得られるようになり、昔から長い間続いていた主婦の水汲みの苦労は、それ以来はすっかり無くなったということである。

炊事用以外の風呂や洗濯用等のいわゆる一般用水は、常時豊富に流れている川の水が随時自由に利用されていた。

大正十年に長宿地区に伝染病が発生し、大流行をして死亡者まで出たことがあり、その原因の究明や伝染経路等に関して、当然この番神水が重要な調査対象となったが、水源の検査の結果は何等異状はなかったそうである。

しかしこのことがあってからは、自家用の井戸を掘る家が次第に増えて、昭和三十一年にこの地区に町営水道が給水を始めた頃には、既に半数に近い家が井戸水に切り替えをしていた。また飲料用に土管を利用し

た給水も、水道が通水したこの時点で、その使命を終り不用となって、取り外されてしまった。

昭和の初め頃、各地で防火対策の一つとして、貯水槽の構築が行なわれた。長宿地区では将来枯れることはないだろうと言われるこの湧水を活用し、流出口付近の空地を利用して造られた貯水槽が現存している。

新田宿や四ッ谷方面の農家は、耕作する畑が遠いため、農作物の収穫運搬の時以外に、畑に行くといえば、弁当持参が当り前であったという。この野良弁当に絶対に欠かせないのが「水」である。炎天下の労働で汗を流した時、喉をうるおす水の旨さは、体験者でないと解らないと言われている。前記の地方ではどこも浅井戸のため、湧水とは水温がまるで比較にならなかった。そのため夏になって畑に行く時は、どうしても冷たい水が欲しいので、途中で円教寺の南側を廻り道して番神水に立寄り、冷たい水を水樽に詰めて持って行く人が何人もあったという。大体昭和十年頃までこんなことが続いていたそうである。

座間下宿の黒沼酒造店では、酒を仕込む時に使う水は特にこの番神水を選んだようで、昭和の初期頃まで毎年仕込みの時期になると、大勢の杜氏（酒造りの職人）が、この水を大きな水桶で何回も運んだという話も残っている。

この泉は昔から湧出量が殊に豊富だったと言われていたが、昭和十四年に台上一帯が陸軍士官学校の用地となった頃からしだいに減水して、現在は往時の水量の半分以下に減ってしまったといわれる。しかし減水したとはいっても、一時間当り約三十二立方メートル余の湧出量があって、流域の家々では一般の雑用水として昔と変らず、かなり重宝にこの水を利用している。

大切な水源の保護と、汚濁防止のため、地元の要請で昭和五十一年に市当局によって、保護柵が設けられて湧出口近くへの立入りは一応禁止する措置が採られている。

番神水に関して一つの伝説が残っている。座間中宿在住の鈴木周廣氏の先祖の鈴木弥太郎という刀鍛治が、この番神水を使って打った刀が、日蓮上人龍の口法難の時の有名な蛇胴丸で、この刀が三つに折れたことから、弥太郎は日蓮に深く帰依し、自分の屋敷を円教寺の敷地にしたという話である。

番神水の流れ　上方が湧水箇所　56.2撮

これに対して地元の郷土史家は、日蓮上人の法難は文永八年であり、鍛治文書として現存する記録によれば、鈴木弥太郎が刀鍛治をしていた年代は、天文年間であるから、この方がずっと後のことで、その間に約二百八十年位の年代のずれがあって、伝説は信用用出来ないと解説している。しかし今でも地元の大部分の老人達は、この伝説を真実として根強く信じているようであり、真疑の詮索は別として、矢張りこの話は番神水に関する一つの伝え話として残して置くべきであろう。

何れにせよ、こうして時代の違いはあったとしても、この泉を使って立派な日本刀が鍛えられたということは、誰も否定出来ない事実だと思われる。

近頃不時の災害発生時に対処するための、色々な対策が講じられている中で、最も重要なものの一つが、〃飲料水の確

保〃であると言われている。いつの日にか必ず起るであろうと予想される大災害に対して「水道の破損断水」等は、当然考えられるところで、緊急の場合、直ちに代って必要な飲料水の補給が出来るのは、市内各所に現存している湧水である。これらの湧水は「生命の泉」ともいうべき掛け替えのない貴重なものであり、今後の不測な事態に備えて、更に一層適切な維持管理が望まれるところであり、この番神水もその一つであることは申すまでもないところである。

三、吉川の泉

小俣国栄

所在地　⑧入谷一丁目三五三〇番地と同三五四一番地の境

水温　未調査

湧水量　未調査（調査対象には水量不足）

入谷一丁目の龍源院の北方凡そ百メートル程の山麓に、昔から通称「吉川の泉」と呼ばれている湧水がある。泉を利用している家の大部分が吉川姓であるからだと言われている。

この泉は湧出量も相当に多くて、古くから流域周辺に住んでいた六世帯にとっては、井戸水に代る大切な、〃生活用水〃であったばかりでなく、非常の際の〃防火用水〃としても、何時でも利用出来る大変貴重な水源であって、昭和三十一年にこの地域に市営水道が給水されるまでの長い間、重宝に利用され続けてきたのである。

大正の初期頃から終戦前年までの約三十余年の間、この豊富な湧水を利用して「山葵（わさび）」の栽培が行なわれていた。この栽培事業は流域に関係の深い七、八名の人達が共同組織を作り、湧出口の下の土地四十五坪程を、龍源院から借受けて開墾し、山葵田を経営していたものだという。

吉川の泉　今は自家水道も設置されている。右下が山葵田跡　55. 7 撮

山葵の栽培は実際にやってみると、中々思うように旨くいかないそうである。台風や豪雨の時には、急に泉が増水し、水源や周壁から土砂が流れ出して、山葵の根元を埋めてしまう。これをそのままにしておくと山葵は根腐れして全滅してしまうので、直ちに掘り返して土砂を洗い流してから植え替えをしたが、そんな年にはあまり収穫は望めなかったということである。そしてこのような水害を受けない年は相当の収益があったというが、平均してはそれ程大きな成果は挙っていなかったということである。こんな状態が続いた為か、或は時代の推移につれて生ずる共同経営という集団事業のむずかしさからか、その辺の理由は明らかでないが、昭和十三年頃で共同組織は解散し、栽培を止めてしまったという。その後は共同経営者であった人の親戚に当る、相模原市古山在住の「白井」という栽培の専門家が、個人で経営を引継いで、数年間栽培を続けていたが、これも終戦前に中止して、それ以後は全く栽培されないということである。この山葵田は三十数年を経て現在は、

雑草に被われ放置されたまま荒れ果てているが、大体以前の形態で残されている。

戦前までに比べ、今の泉の湧出量は相当に減少しているそうだが、依然として絶えることなく湧き続け、飲料用以外の一般生活用水として、昔と変らず流域八世帯の人達に重宝に利用されている。

こうしてこの泉は今でも流域に大きな恩恵を与えている訳で、これに対して利用者も水路には天然の雨水以外は何も流入しないよう、常にお互が注意して管理しているため、長宿公民館の北側で、谷戸川に合流するまでの短かい区間ではあるが、流末付近に於ても殆んど汚濁されていない清い流れとなっている。

時節柄河川の汚染防止上からも誠に結構なことである。

四、竜源院及び心岩寺の湧水

赤・石　智　子

両湧水は竜源院及び心岩寺境内より湧出するので、竜源院湧水、心岩寺湧水と仮称する。

両湧水とも、条件、歴史が類似しているため併記形式とした。

(一)　湧水の所在地、所有者、特徴

a.　竜源院湧水　⑨入谷一丁目三五二三番地

湧水の位置　庫裡東側境内弁財天横の崖下より湧出、前面に弁財天池あり

所有者　竜源院

水温　十七・六度

湧水量　毎秒〇・〇〇二～〇・〇〇一㎥　日量一七三～八六㎥
（昭和五十二年一月四日　同三月二十日市水道部調査）
夏・冬、量にめだった変化はないというが、境内を湧水路が貫流する鈴鹿神社の話では、昔の方が水量が豊富だったという。

b　心岩寺湧水

⑩入谷一丁目一五五二番地
湧水位置　境内不動池滝つぼより湧出
所有者　心岩寺
水温　十七・四度
湧水量　毎秒〇・〇〇八～〇・〇〇三㎥　日量六九〇～二七〇㎥
（昭和五十一年五月三十一日　同五二年一月四日市水道部調査）
心岩寺住職の話では、夏溢水し、冬多少枯れる。

（二）地層及び湧水条件

座間市水道部の調査によると、竜源院と心岩寺の湧水は、標高三十五m前後の相模川河岸段丘（中津原面）の下部砂利層より湧水するものであり、市内立野台公園の池や座間消防本署裏の粘土層の「しぼれ水」（寄せ水）である湧水とは区別される。座間丘陵（天台・本堂山・三峰台等）の西側に附着した中津原面は、座間キャンプ西側から皆原一帯にひろがって居り、これは関東ローム層（武蔵野ローム）と砂利層（武蔵野礫層）から形成されている。

この砂利層に地下水面がある為、この一帯から湧水がみられ、竜源院湧水、心岩寺湧水その他の崖下泉列となるのである。

竜源院湧水Ⅰ　湧水位置。砂礫の間よりも滲み出ている　55．7撮

(三)　湧水利用の歴史

(1)　先史時代と湧水

竜源院湧水地より一〇〇m程離れた鈴鹿神社本殿下に縄文中期の住居址があり、「鈴鹿神社遺跡」と呼ばれている。（本市文化財調査報告第二「蟹ヶ沢、鈴鹿遺跡」参照）この遺跡附近における湧水等の水場が、現竜源院湧水のみである所から、鈴鹿遺跡住人がこの湧水を生活用水として利用していたことは、十分に考えられ、竜源院湧水の歴史の長さを物語る一資料として鈴鹿遺跡を考えることが出来る。

心岩寺湧水に関しては、同寺住職白井光信氏によると、心岩寺境内より土器片が発見されて居り、東側台地上に縄文中期の遺跡が分布している。（前出本市文化財調査報告第二参照）又、心岩寺より一〇〇m程南方に離れた沢田氏宅（入谷一丁目―下鈴鹿―一五六六番地）に鈴鹿横穴群第一号がある。（同前参照）これ等の遺跡の所在は、現心岩寺湧水が、先史時代から継続して利用されていた可能性を物語るものであり、いずれにせよ両湧水とも両寺院建立をはるかにさかのぼった時代から、附近の住民たちの生活に関連していたと考えられる。

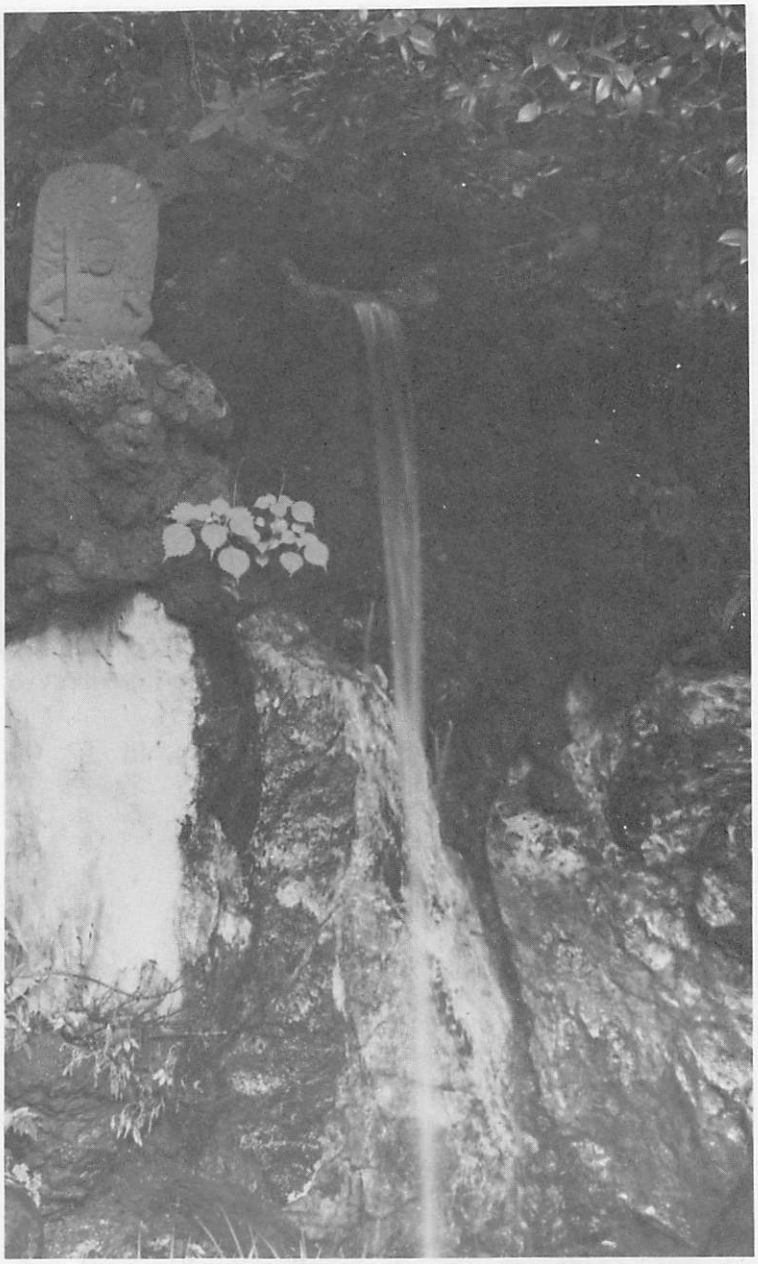
(2)　湧水と土師、須恵器時代（古墳時代）

心岩寺附近及び竜源院附近において、弥生式遺跡またはその遺物は

現在迄出土して居ず、為に、湧水の歴史も縄文期より一挙に土師、須恵器時代へと飛ぶ。

前述のごとく、心岩寺より一〇〇m南方に鈴鹿横穴群第一号があり、附近より完形須恵器（座間市教育委員会蔵）出土の事実がある。

これら、鈴鹿横穴群、及び南の根下横穴群と湧水群とは、同段丘地帯にほぼ並列して居る。また竜源院付近からも土師器が出土し、いずれも、湧水との関連が濃厚である。これ等の出土は、湧水を利用した稲作農耕を物語るものと見てよいだろう。湧水位置から考えれば、水田は相模川河岸段丘前に広がる狭長な後背湿地帯に開かれていたとするのが自然である。



心岩寺湧水Ⅰ　滝は人工的に作ったもの。実際の湧水位置は中央の石の背後で、高さは写真の最下部くらい　55. 7撮

また、古墳は往々にして古墳埋葬者の支配地域を見渡せる位置に築かれて居り、このことからも横穴（古墳）群前面に広がる後背湿地帯が開田されていたことは確かである。これ等の低湿地帯の田（標高二七・五m～二五m）へ、すでに湧出していたと考えられる、現心岩寺湧水（標高三五m前後）も、用水の一つとして流下させ、大いに利用していたものと推

定される。

現在、弥生式遺跡が未検出である事実は、これらの湧水を用水として流下させる技術、また湿地帯における排水路整備に関する土木技術が、座間付近では古墳時代にはいってはじめて可能だったと受け取られるのである。もしくは、後背湿地が狭長なる為、採算に合わず、放置されていたとも考えられる。

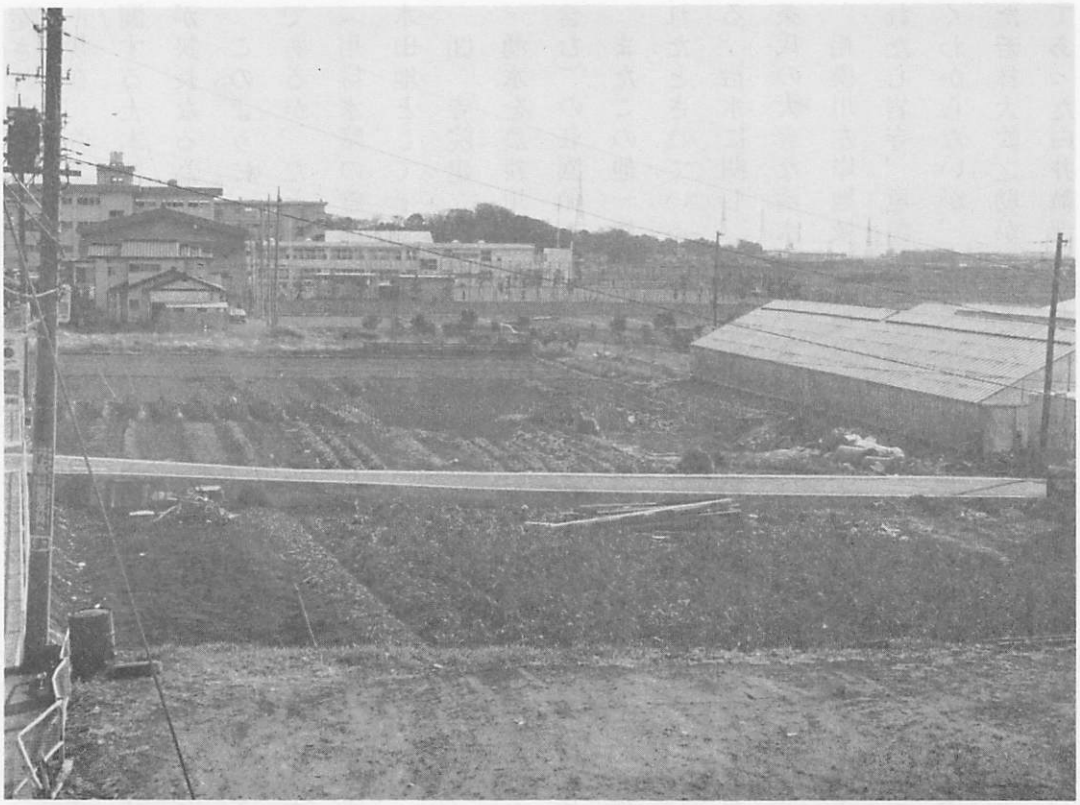
このように、後背湿地に水田が開かれた事実は、座間のみならず他地方でも見られる。用水を大河川の支流に頼る場合であるが、たとえば愛知県矢作川右岸部の台地下一帯、西本郷の後背湿地帯付近からも土師、須恵器の出土が盛んであり（用排水路の整備が前記湧水例より簡便の為か弥生式遺物も出土している。岡崎市史矢作史料編　参照）、後背湿地帯が水田地として早くから着目されていたことになる。

(3)　寺院建立前後の湧水

湧水を農耕用水に利用することに関して、「相模武士団の成立と展開」で阿部征寛氏は、鎌倉時代、渋谷庄（座間市も含む）の荘園領主一族が、湧水地を重要視し、その地を保持し、周囲を神域化した天神社の例をあげている。

またこの他一族の居城跡（綾瀬市早川城址）山裾では、現在でも豊富な湧水が流出しており、一族の菩提寺跡に建立されたとされている長泉寺附近からも湧水がわずかながらも見られ、鎌倉時代の開発領主が湧水に着目していたことが窺える。治水に関し、戦国大名の小田原北条氏は、主として酒匂川、荒川にその目を注いで居り、両川の改修、築堤工事が北条氏の大きな治水工事であった。（玉城哲、旗手勲「風土」・旗手勲「米の語る日本の歴史」参照）

相模川左岸地域に大規模な治水工事がなされる以前、湧水は重要な用水源であったと考えられる。この湧水地に建立された心岩寺、竜源院の創建については、両寺院が明治年間の山くずれ等の災害の為、寺院所有の古文書が消失していてよくわからないが、大正十三年の明細帳によれば、心岩寺は、郷士白井織部是房が開基となり、竜源院は、村に居住していた若林大炊之助が開基となっている。また、「新編相模国風土記稿」によれば、心岩寺開基であり、座間七ケ村の地頭職であった白井織部は文明元年（一四六九）没である所から、心岩寺は室町中期の創建であると考えられる。また竜源院は



心岩寺湧水Ⅱ　その潤した田圃の跡の畑。写真左手心岩寺参道入口　56．2撮

新編相模国風土記稿によると、開山の格雲（厚木市三田清源院の八世住職でもある）の没年である所の寛永十一年（一六三四）から逆算すると、心岩寺に比較してかなり遅れて開山したことになる。しかし、同書によれば、鈴鹿明神社棟札裏書に「五千疋施主若林大炊助云々」の記事が見える。弘治二年（一五五六）のことである。竜源院開基の若林氏と同一人であるならば、寺院建立を戦国末期迄さかのぼらせることができる。

この白井氏、若林氏の社会的地位は、永禄二年（一五五九）にできた「小田原衆所領役帳」には、両氏の名がない所から、小田原北条武士団に直属しない郷士か、あるいは座間一帯を当時領していた支族（陸奥守氏照）の陪臣であろう。

いずれにしても、心岩寺が館付近に建立されていたという説（新編相模国風土記稿）もあり、建立された地が偶然に湧水地であったというのではなく、意味ある建立地設定であったと思われる。

大規模な築堤工事がなされる以前、河原べりの低地での耕作は、洪水や河道変化の影響を直接に受け、耕作地としては不安定なものであり、悪条件下にあったと考え

竜源院湧水Ⅱ　わさび田の跡。弁財天祠は中央の木蔭で見えない　55．7撮

られる。

一方、湧水を用水として利用した場合、大規模な地域を潤すことは可能ではないが、小規模な土木技術で用水化出来、その上、水量に安定性があり、水温に関しても、流下させる過程で温度を上昇させる事で、確実な収量をあげ得たはずである。後背湿地の傾斜面を利用した田に湧水を流下させることで耕作していた為、相模川の河道変化や洪水に直接関りのない、入谷近辺での耕作は、その意味で安定して居り、両寺院及びその開基の経済的基盤を支えるものであったと考えられる。この意味からも、湧水地をおさえることは、飲料等の生活用水及び農業用水に重く関わることであり、重要な意味を持っていたと思われる。

湧水地に寺院を建立した利点の最大のものは、湧水地を神域化することで、他の力（小田原北条氏及びその支族や地域的な在地の力）に対し、湧水に対する寺院もしくは開基の権利を強め、その力を保持せしめたことであろう。また現在

竜源院湧水Ⅲ　洗い場で境内の外れ。湧水は上方より流れ出る　　55．7撮

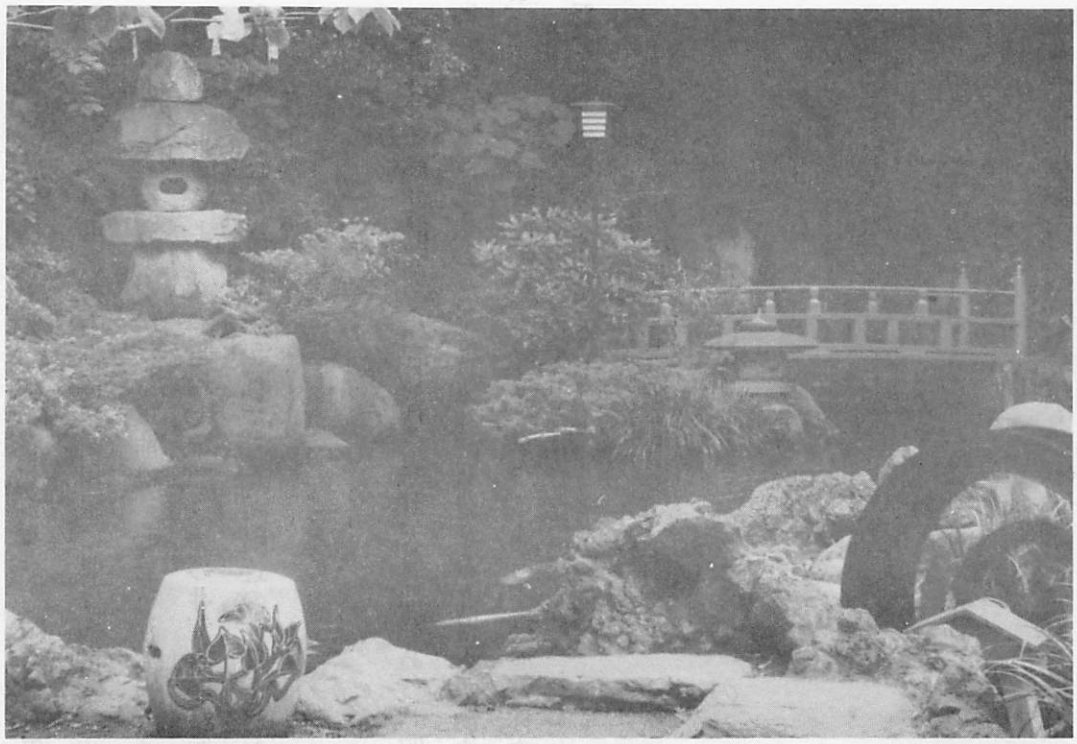
に至るまで、湧水地そのものの保護の力となった（他の湧水地は現在土砂等で埋っている個所も見られる）ことも見逃せないことである。

(4)　明治年間土地公図作成以後の湧水利用

現在の座間の水田は、昭和十三年から耕地整理の為、昔のおもかげはない。明治八年の土地公図によって、整理以前の両湧水が潤していた田の様子を、市役所産業課の川島氏の説明でみてゆくと次のようになる。

心岩寺湧水は、諏訪前と谷中の水田一～二町歩を潤していた。この湧水については、前農地委員であった飯島忠雄氏によれば、根下の神井戸の水、谷戸川の水とも併わせて、昔から「天水」と言われ、入谷地区の水田十二、三町歩を灌水して居り、是を天水場といった。鈴鹿前から皆原根下の北端までの田を潤していたが、昭和十三年以前は、夏の日照りの為、しばしば干害を蒙り、水争いが起ったこともあるという。

また公図によって竜源院湧水を見ると、小字宮の西、田中等の田を潤していた。規模はおよそ一、二町歩位である。その他、前述の鈴鹿神社本殿東側の田五枚（二反程）を潤していたが、現在、竜源院湧水の潤していた田は、ほとんど宅地化して居る状態である。



心岩寺の湧水Ⅲ　池を作っている。水は浅いが大きな鯉がたくさんいる　55．7撮

この他、両寺とも境内にわさび田を作って居た。竜源院では、明治二十四年に麻溝の住人が境内でわさびを栽培して居り、第二次大線迄続いていた。現在も境内にわさび田跡が残っている。

心岩寺でも、昭和十六年正月迄、わさび田を持っていたが、今はその跡は消滅している。心岩寺住職によれば、湧水路に生息していたものとして、セリ、イモリ、フナ、ナマズ、ウナギをあげて居られる。

農業用水としての他、動力源、飲料水としても大いに利用されていた。

明治三十五年以来、生糸を撚って撚糸にする揚場の水車の動力源として竜源院湧水が利用されていた。この揚場の位置は、鈴鹿神社脇の野島藤太郎氏（故人）宅にあった。またこのほか湧水は、米をつく水車もまわしていた。

飯島氏（前述）によると、現在、竜源院湧水は、鈴鹿神社境内を貫流し、市役所下を通り番神水（湧水）と皆原の灌漑水路で合流する。

心岩寺湧水は、心岩寺前の田を灌水しているが、産業課の話では、五～六反程度だということである。また農業用水として使用する場合、両湧水に対する用水料支払いの事実は特

に無いとのことである。過去においても、特に湧水使用料を支払った事はないという、鈴鹿神社の話である。

これ迄、農業用水を中心に産業用水における湧水利用を主として述べてきたが、飲料水としても利用されて居り、昭和三十年頃迄、水道が引かれる以前は、心岩寺湧水は、自家用飲料水とされ、竜源院湧水は沿道住民に共同利用されていた。故竜源院住職によると、昭和七年、役場の井戸水が飲料として不適になった為、現市役所・農協に鉄管を通し、水道が出来る迄飲料水として利用されてきた、附近の住民もこれを使用していた、ということである。

(四) 信仰

竜源院には弁財天がまつられ、弁財天信仰がある。四月巳の日に例祭があり、かっては芝居等を呼び寄せ、大々的に祭りがおこなわれていた。現在も、石造りの弁財天が湧水脇にまつられてある。

心岩寺では、古来、不動尊をまつる池を不動池と称する。この不動池にて、正月三ヶ日と夏期おせがきの早朝、住職誦経のならわしがある。

五、神井戸・その他

井上収一
大谷之彦

所在地　⑭入谷二丁目一七三一番地
水温　十六・〇度
湧水量　毎秒〇・〇〇六八～〇・〇〇六m^3　日量五八八～五一八m^3

（昭和五十二年一月四日　同三月二十三日市水道部調査）

市内の皆原根下、座間高校の北東前に「神井戸」と呼ばれる湧水がある。昔ほど水はでていないが、現在でも水量が豊富で水質も良く、飲料水としても十分利用できる。

皆原の沢田覚氏所有の地図によると、昔の泉の面積は現在の十数倍あったようである。この泉は、古くから飲料水、米、野菜、農具、衣料等の洗い水や水田用水として、広く利用されてきた。

この泉を主に利用したのは、泉北側に住む根下飯島氏、南側に住んだ根下沢田氏、台地上の皆原沢田氏と内藤氏の各一族であったようである。泉の利用方法を決め、上の部分では飲料や食物の洗い場とし、下の部分で農具や衣料の洗い場として、各自それを守り利用していたようである。

第3図　心岩寺湧水・神井戸・その他

神井戸　コンクリートブロックは最近敷かれた　55．7撮

泉の近くには、前に根下道、後上には鎌倉街道がそれぞれ南北に通っている。そして、泉をはさみ逆八字形の坂道があり、根下道と鎌倉街道を結んでいる。この坂道が両方とも神井戸坂と名付けられた道である。この坂道は、皆原の人々が泉から水を汲みあげるため利用したり、下の田んぼから稲を運び上げるために利用したので、別名「水汲み道」「稲あげ道」とも呼ばれている。昔、鎌倉街道を旅する人達がこの坂を下り、神井戸の冷たい水でのどを潤し旅の労をいやしたことだろうと思われる。

「神井戸」の名のおこりについては、近所の人々でもはっきり知らないようである。生活のため必要な水を自然に神様が恵んでくださるので、神様が作ってくれた井戸という意味で、「神井戸」と誰いうとなくついたのではないかと思われる。

この泉には、水の神様の弁財天が祭られている。古くからあるようだが、誰がいつ祭ったのだかはっきりしていない。祭日は特に決めていないようだが、毎年正月になるとしめ縄を飾り、盆には供え物をあげたようである。現在でも一部の家でこの風習を続けている

ようである。

大正十二年九月一日の関東大地震の時でもこの泉は枯れず、多くの水が湧き出ていたという。当時は多くの人々の心配の一つは飲料水の確保であった。井戸が崩れ水が使えなくなり、遠く新田宿、四ッ谷方面からも、この神井戸に水を汲みに来た人がいたという。新田宿のある人は、自分の家の井戸が使えなくなったと思い、神井戸まで水汲み来て、天秤で両桶一杯水を入れ、やっと家までたどり着いたら水がほとんどなくなっていた。がっかりし井戸を見たら水があったというエピソードがある。

根下には、この神井戸の外に二つの湧水があった。現在は共に枯れて、その跡が残っているだけである。

梨の木坂湧水の跡　石が濡れているだけ。沢蟹がいた　55.7撮

その一つは、梨の木坂の下の⑬入谷五丁目一七三五番地と同一五七九番地の境で、鈴木氏の宅地のそばである。この泉は根下の鈴木氏一族が主に利用したものであると思われる。

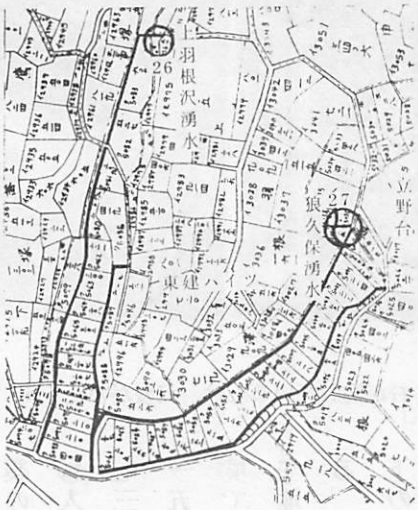
もう一つは⑯

根下南湧水　芥川商店の北。僅かに水溜りがあり汚水が流入している　55. 7撮

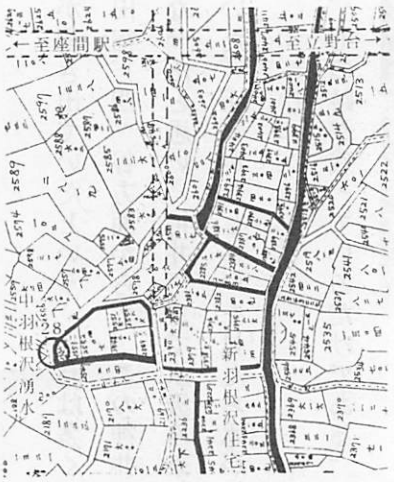
入谷五丁目一九三五番地で、座間高等学校南前、芥川商店の北側である。ここの利用者は主に皆原の飯島、芥川、一杉の各氏一族であったようである。

台地上の皆原の東側の丘と平地との境目あたりにも、

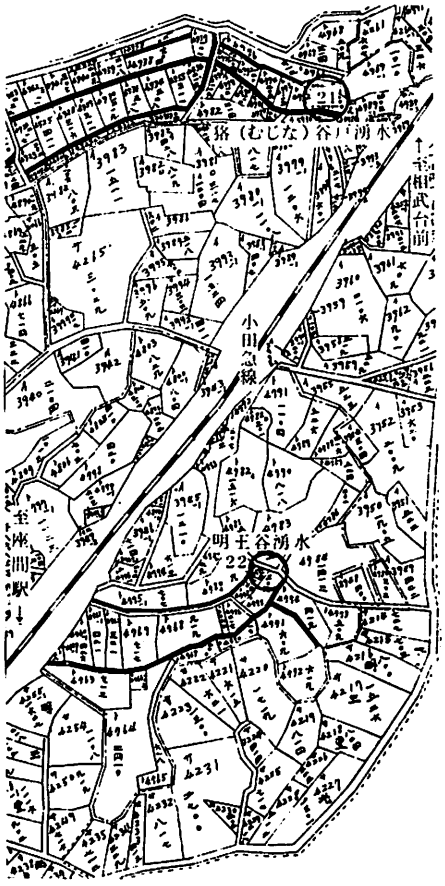
第4図　上羽根沢・狼久保の湧水



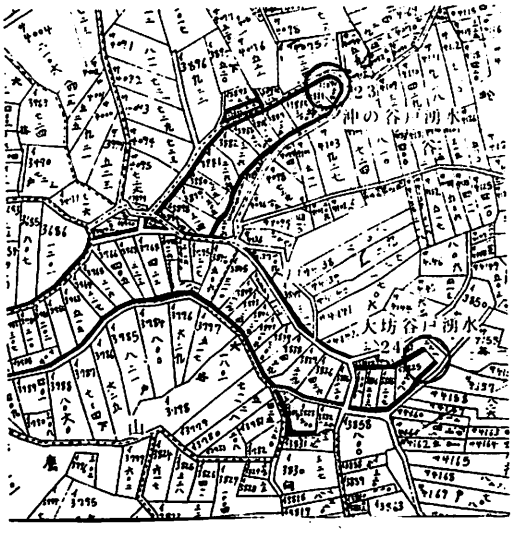
第5図　中羽根沢の湧水



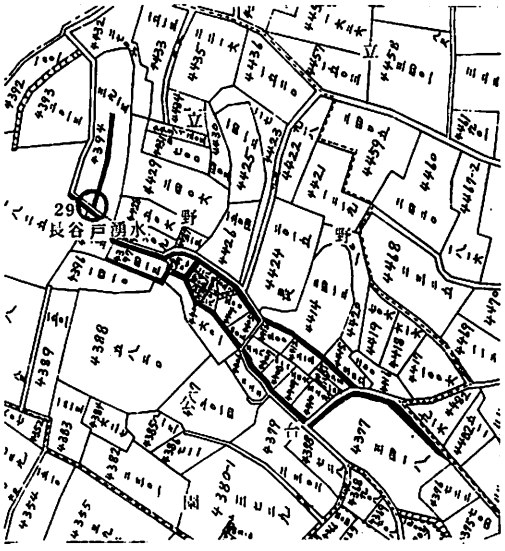
第6図　狢谷戸・明王谷の湧水



第7図　沖の谷戸・大坊谷戸の湧水



第8図　長谷戸の湧水



小量ながら三つの湧水があって、それぞれ、大塚、井上、内藤の各氏一族が利用していたようである。大塚氏の泉の北東方の丘の中腹には、小範囲ながら土師器片の散布もみられるので、それらと何等かの関連があるかも知れないが、今のところよくわからない。

六、小池・蟹ケ沢の湧水

鈴木芳夫

所在地

(一) 小池　㉚栗原一二九一番地地先
(二) 小池南　㉛栗原一一九〇番地（小池公民館）
(三) 蟹ケ沢　㉜栗原一四五六番地周辺
(四) 後ろ谷戸　㉝緑ケ丘一九四八番地

(一) 小池

相武台東小学校北方約二百メートルの処にあった湧水である。栗原一二九一番地には弁財天社と白髪社を相殿にした小祠があるが、その前に児童遊園地がある。その遊園地になっているところに、約三十平方メートルほどの池があった。これが「小池」である。

この小池には清水が湧き、ここから目久尻川が流出していた。ハヤが特に多く、ウナギやフナが群れていたが、水は季節によって増減した。湧水量の多いのはむしろ秋で、春先きには最も少なかった。深さは一・五メートルほどであって、雨季には溢れるようになることもあったが、減水期になると底の方に溜っているだけで、魚が手づかみできるようだった。

川は両岸が高くて、周囲の土地へ水を引き入れることができず、約八百メートル流れ、小池公民館の処の湧水（後述）を合せてから、ようやく水田の用水とされるようになっていた。

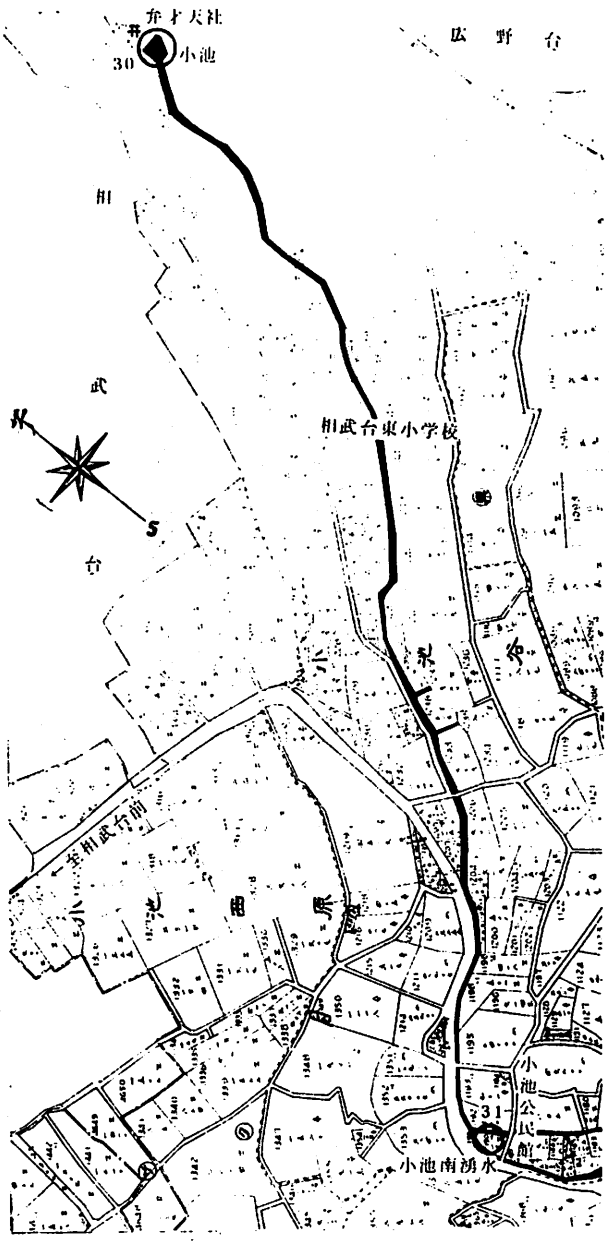
関東大地震（一九二三）以後は湧水量が減り、年によると全く枯れてしまうようなことがあったが、昭和三十年代に入

って、相模台方面の下水路がこの川に接続され、一方開発に伴って湧水は全く止まり、遂に周辺に宅地が造成され、昭和四十五年に池は埋め立てられて、現況のように児童遊園地とされてしまった。

弁財天社の祭礼は三月三日であるが、その日には下流十数キロメートル離れた寒川の村民の代表が毎年参拝にやって来た。目久尻川の水のうち、小池から湧出する量はむしろ少なかったが、大切な用水の源流として、下流の人々から特に大切に扱われたものである。

ついでであるが、目久尻川は明治六年まで「寒川＝さむかわ」と呼ばれていた。「寒い」は平安時代初期まで「冷い」と同じ意味であった。「冷い川」とは、目久尻川の特徴をそのまま言い現わしたもので、以下本書で述べられる栗原方面の湧水をほとんど全部集めて、下流の重要な用水となっているのである。

第9図　小池谷の湧水



また目久尻川は小池より流出するので「小池川」とも呼ぶ人がある。

㈡　小池南湧水

小池より流れ出した川は上小池の集落の南端で東方へほとん

小池の跡　池は手前の広場にあった。鳥居の向うは弁財天社と白髪社の相殿　56.2撮

ど直角に曲る。この内側が小池公民館で、ここの敷地内にも湧水があって、池とはならず目久尻川へ流出していた。

その水量は小池よりも多いくらいで、その湧出口から噴き上らんばかりの強い勢いで湧出していた。しかし関東大地震以後、湧水は全く止んでしまって、現況のように全く跡形もなくなってしまっている。

小池の水田はこの下流以下であった。

なお、(一)・(二)を通じて、これに対応する縄文遺跡は谷の西側であって、だいたい中期（四千五百年より四千年以前）であるが、詳細は調査されていない（市文化財調査報告「蟹ヶ沢・鈴鹿遺跡」参照）。

(三)　蟹ヶ沢湧水

蟹ヶ沢は小田急線南方の谷で、目久尻川の谷に通じており、巾は最大でも百メートルくらいであり、両側は切立った崖である。

この谷が東西方向から南北方向に曲るところに豊かな湧水があったが、小池などと同じく関東大地震以後湧水量が減り、昭和二十年代から上部が開発されるとと

蟹ケ沢湧水の跡　写真中央部あたりから多く湧出していた。蟹ケ沢は目下公園造成中である　56.2撮

もに、全く枯れてしまった。

この谷底には水田が開けており、他の湧水地と同様に、ハヤ、ウナギ、エビ、カニなどが多くいた。地名もカニが多くいたことによるものであろう。

地籍からいうと、この谷底の水田部分は栗原で、両側の台地は座間と入谷であった。というのは土地がほとんど自由勝手に開拓できた時代に、ここへ水田を開いたのは水田の少なかった栗原の人々であったので、それが後に公認されるようになったものであろう。

水田が開けたのは、湧水があったためであったが、両側の台地上には小池と同じく、縄文中期の遺跡がかなり濃密に分布している。（前記報告参照）

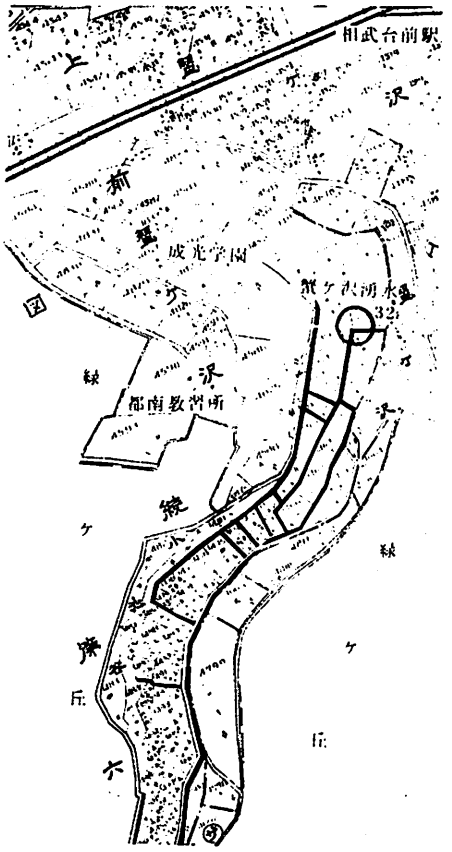
(四) 後ろ谷戸湧水

蟹ケ沢は座間中学校東側で東方へ曲って、小池南端で目久尻川の谷に合するが、その東方に向う部分の丁度中間にあった湧水である。通称後ろ谷

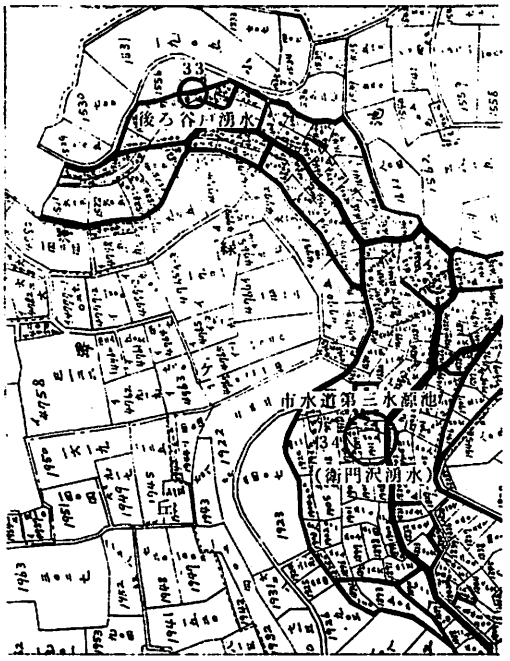
戸（小池集落の背後にあるので）という浅い谷が蟹ヶ沢へ連なる所である。上部が開発される前はかなり湧水量があり、昭和四十年頃宅地造成のため埋め立てられてしまったが、その後もしばらくは水が滲んでいた。付近台地上はやはり蟹ヶ沢小池西原に連なる縄文中期の遺跡である。

以上本報告は小池の加藤一郎氏の談話によるところが多い。

第10図　蟹ヶ沢の湧水



第11図　後ろ谷戸・衛門沢の湧水



七、上栗原の湧水

井上収一

所在地

(一) ㉞市水道第三水源池（衛門沢湧水）栗原一九一一番地外周辺
(二) ㉟入りの谷戸湧水　緑ヶ丘五七九七番地周辺各所
(三) ㊱入りの谷戸下湧水　緑ヶ丘五二五三番地
(四) ㊲座間基地上栗原東水源地（上谷東湧水）旧栗原二三二〇番地（区画整理で現在の地番不明）
(五) ㊳座間基地上栗原西水源地（上谷西湧水）栗原四八九六番地外

(一)　市水道第三水源池（衛門沢湧水）

小池と上栗原を結ぶ谷間に目久尻川が流れている。この中間の西側に市営水道の第三水源池がある。この近くに豊かな湧水があった。昔はこの水を利用して約一町歩の水田が耕作されていた。水が豊富にあったため底なし水田が多く、稲作作業は田下駄を用いて行われた。

このあたりでは、うなぎがよくとれたので、子どもたちの楽しみの場所でもあった。前の晩つり針にみみずをつけ、水の流れこむ水田の穴に入れておくと次の朝うなぎがかかっていることがしばしばあった。うなぎとりは、このつり針の他にもじりを利用する方法もあった。

谷間の両側と北側は台地になっており、ここに降った雨水が地下にしみこみ、相当昔から湧き出ていたと思われる。水田の用水として利用されだしたのもはっきりしないが、上栗原の崇福寺の建立が約四百七十年前だといい伝えられているので、そのころではないかと思われる。

市水道第三水源池（衛門沢湧水）　写真中央下のやや白い部分は枯草
湿地であった名残りである　56.2撮

この湧水は昭和四十八年に市営水源池ができるまでは、かなりの量が湧き出ていた。水源池ができて完全に枯れたが、今では市の上水道として市民に利用されている。

なおこのあたりには相模一の宮の寒川神社の御供田（ごくうでん、神様に供える稲を作る水田）があった、と伝えているが、それが具体的にどの辺の水田で、どのくらいの面積であり、何時ごろのことなのかは、全くわからない。ただこのあたりはどんな日照りでも絶対に水が枯れず、不作ということがなかったから、御供田ができたのだろう、という。

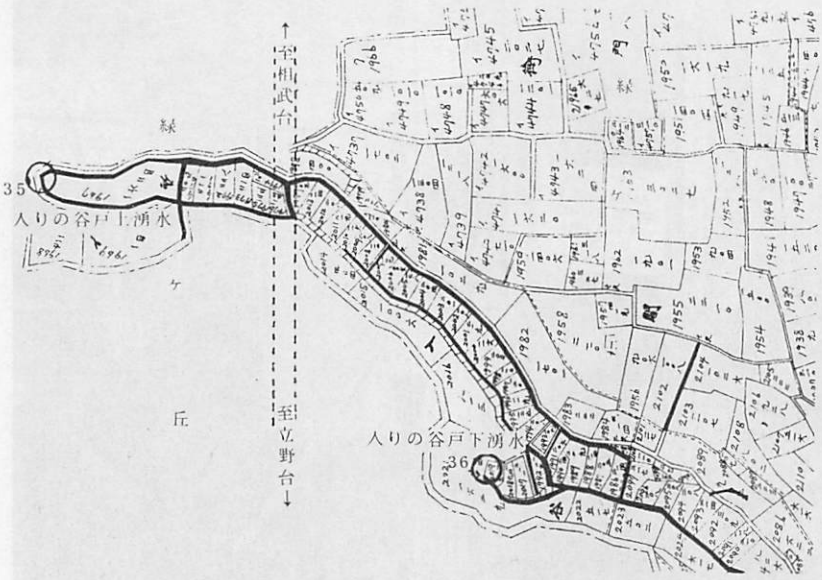
（二）入りの谷戸湧水

市内で一番高い明王堂山に座間キャンプの貯水池がある。その東側の下、現在市営テニスコートのある所から南東方面、目久尻川までの約一キロメートルの谷間は入りの谷戸と呼ばれ、この谷の西側に沿って小さな谷川が流れている。この谷川の上流、明王堂山の下に湧水があった。

現在埋め立てられテニスコートとなっているが、その下から少量の水が湧き出ている。

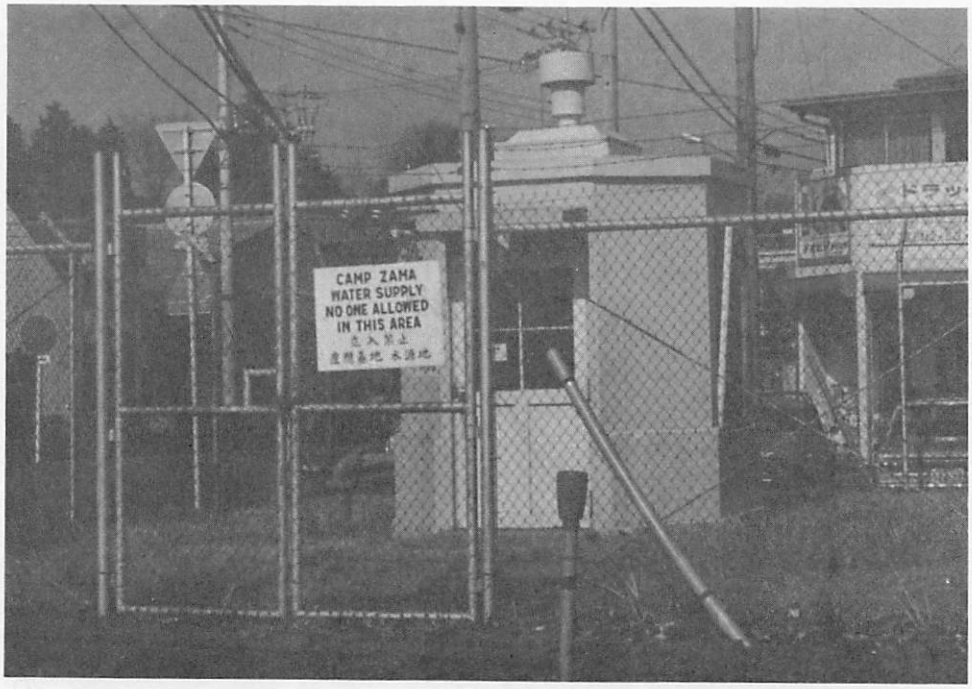
昔、入りの谷戸は、この湧水により約一町歩の水田

第12図　入りの谷戸の湧水



ここも蟹ヶ沢同様、栗原分が座間と入谷分に深く入りこんでいる

入りの谷戸　このような水田がひまわり公園のところまで続いていた　56.2撮



座間基地上栗原東水源地　　詳細は「八 芹沢の湧水」参照　56. 2撮

として利用されていた。昭和二十年頃になり水量が減少したので、貯水池の水を流してもらい耕作するようになった。現在では、上方が埋め立てられ、一部しか水田は残っていない。

入りの谷戸川の水は、台地の宅地化に伴い汚水となっているが、昔は大変きれいで下流にあたる鈴野氏や井上氏の四軒では、米のとぎ水、野菜や農具の洗い水として利用していた。

川には、はや、ふな等の小魚も泳いでいたり、夏になると蛍が飛びかい、両側の斜面の樹木も春は新緑に、秋は紅葉にと変化し大変よい所であった。

（三）　入りの谷戸下湧水

（二）と同様な性質の湧水で、その南東約四百メートルのところの西側の崖下である。

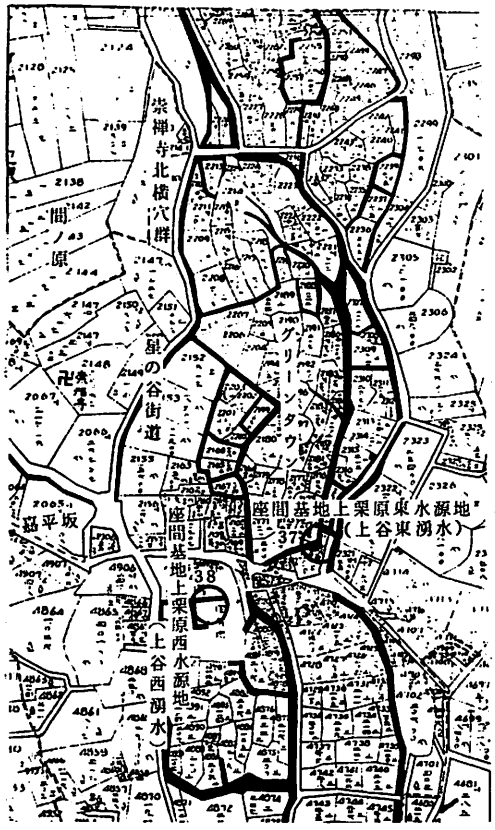
（四）　座間基地上栗原東水源地（上谷東湧水）

青少年会館から栗原中学への市道の北側で、目久尻川の橋の傍にある。

ここに湧水が見られ、直径三メートルくらいの池を作っていて、周囲にオランダガラシ（異人芹）などが生えていた。

この井戸は昭和十二年春、当時工事中であった旧陸軍士官学校の水道の井戸として掘られたものである。

第13図　上谷（かみや）の湧水



（五）　座間基地上栗原西水源地
（上谷西湧水）

（四）とは目久尻川を間にして反対側で、前記市道の南側にあり、両者の間隔は三、四十メートルばかりである。

状況は（四）と同様で、井戸もほとんど同時に掘られた。ここには貯水池も設置されていて、（四）の水も共に貯水され、そして明王堂（ひまわり公園西側）の貯水池へポンプアップされている。

（四）、（五）に対応すると思われる縄文遺跡は西側の台地上で、およそ中期であるが詳細は不明である。東側台地上には見当っていない。

また百五十メートル程離れた崇福寺の北には入谷の鈴鹿や根下の崖面に見られるような横穴が数基発見されていて、伝承はともあれ、この地の集落はすでに千二、三百年前から成立していたと考えられる。

八、報　告　前　記

見　上　昭　二

水にも味があると言われているが、座間の水は冷たくておいしい。特に夏季に京浜方面から来る人に、よくそのように

言われる。座間で生れ育った人には、日頃のなれで、其の味もあまり感じないが、所変れば物（水）変るで、他所へ行って初めて、座間の水のおいしさがわかる。

夏季の水は特に冷たく、おいしい。市内から汲み上げる水を配水池へ送り、消毒殺菌して、家庭へ給水しており、送水距離は遠くても三キロ程度で、直接湧水を飲んでいるのと同じように、おいしいわけである。

水清ければ魚多し、である。人間も共に水の豊かな所に集落を作るものである。すでに教育委員会で発行されている文献にもあるように、座間市の古代文化は、相模川の河岸段丘上と、栗原の目久尻川の流域とに展開しているものであるとされている。この地の各所から出土する土器、集落の跡、横穴（古墳）等も、はっきりとそれを物語っている。

昭和の年代に入り、国が広大な相模野平野と、強い土質の関東ローム層と、森に囲まれた豊かな湧水があることとに着目し、白羽の矢を立てて、まず第一に、昭和十二年に陸軍士官学校（座間、相模原地域内）が設けられ、続いて海軍の第一相模野航空隊、第二相模野航空隊（綾瀬地域内）、厚木航空隊（綾瀬、大和地域内）と、つぎつぎに建設され、最後に東洋一の流れ作業による戦闘機製造工場である高座航空廠が建設されたのであるが、この陸海軍の膨大な施設が使用した水は、ほとんど栗原地区にある湧水から送られたものであった。

第二次大戦後、陸軍士官学校は米軍座間キャンプとなり、厚木等の航空隊は米海軍厚木基地となり、高座海軍航空廠の施設は全部解体され、其の敷地は全部農地に変った。やがて年が過ぎ、その敷地跡には工場街が出現し、それにともなって、人口が大巾に増加した。それは栗原地区ばかりでなく、座間市全体がそのような状況になったのであるが、これは前記の国が着目した三つの条件に恵まれていたからである。しかし今では余りに工場や人口が増加したため、水の豊かであった座間市も、その供給に追われ、特に夏季には節水を呼びかけなければならなくなっている状態である。

水は生命の源、一人一人、一戸一戸が節水を心掛ければ、大変な水量になる。水は有限であるが故に大切にされなければならない。最近また東海大地震の危険性が強調されている。地震に対する心構えを常に持っていなければならない危険地帯が、隣の海老名市までであるとされている。座間市が安全地帯であるとは、決して言えないのである。同じような危

険があることを覚悟している必要があると思う。

一旦大地震になれば、電気、水道は駄目になってしまう。電線は切れ、水道管は各所で折れ、自家発電を始動したところで、送水は不可能である。

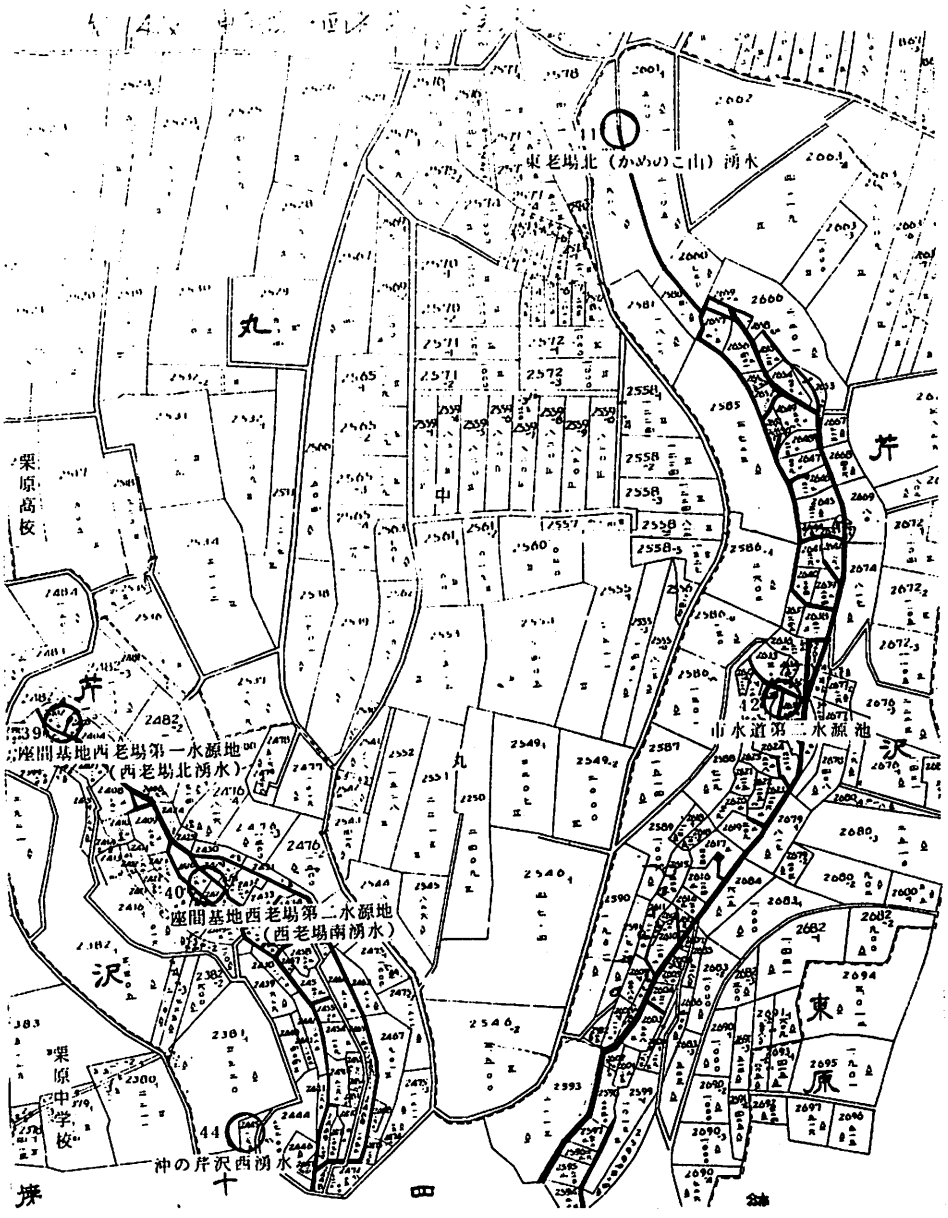
しかし関東大地震の時、湧水の状態はなんの変化もなく、平常通り湧き出ていたという。

もしもの事があった時、まず一番先きに役立つのが湧水ではなかろうかと思う。

座間市では限られた湧水源を、早急によく整備しなければならない、ということを、調査してみて初めて強く考えた。

調査に当っては、先輩諸氏や現地の人々の話を聞き取り、現場を見て回

第14図　東老場・西老場の湧水（次頁参照）



って、付近の状況も調べましたが、十分な調査もできず、書き足らない点もあると思います。しかしこの調査が何等かの役に立つことがあれば幸いです。

なお水道の水源井（池）になっている湧水については、それぞれ所管がありますので、水道としての機能には触れませんでした。

九、芹沢の湧水

見上昭二

所在地

東老場　㊶栗原二五七九番地地先（カメノコ山湧水）　㊷栗原二四三一番地（市水道第二水源池）

西老場　㊴栗原二四〇二番地（座間基地西老場第一水源地）　㊵栗原二四二七番地（座間基地西老場第二水源地）

芹沢谷　㊺栗原二九三五番地　㊻栗原二八九四番地（市水道栗原水源池）㊷栗原二七五六番地（市水道第一水源池）

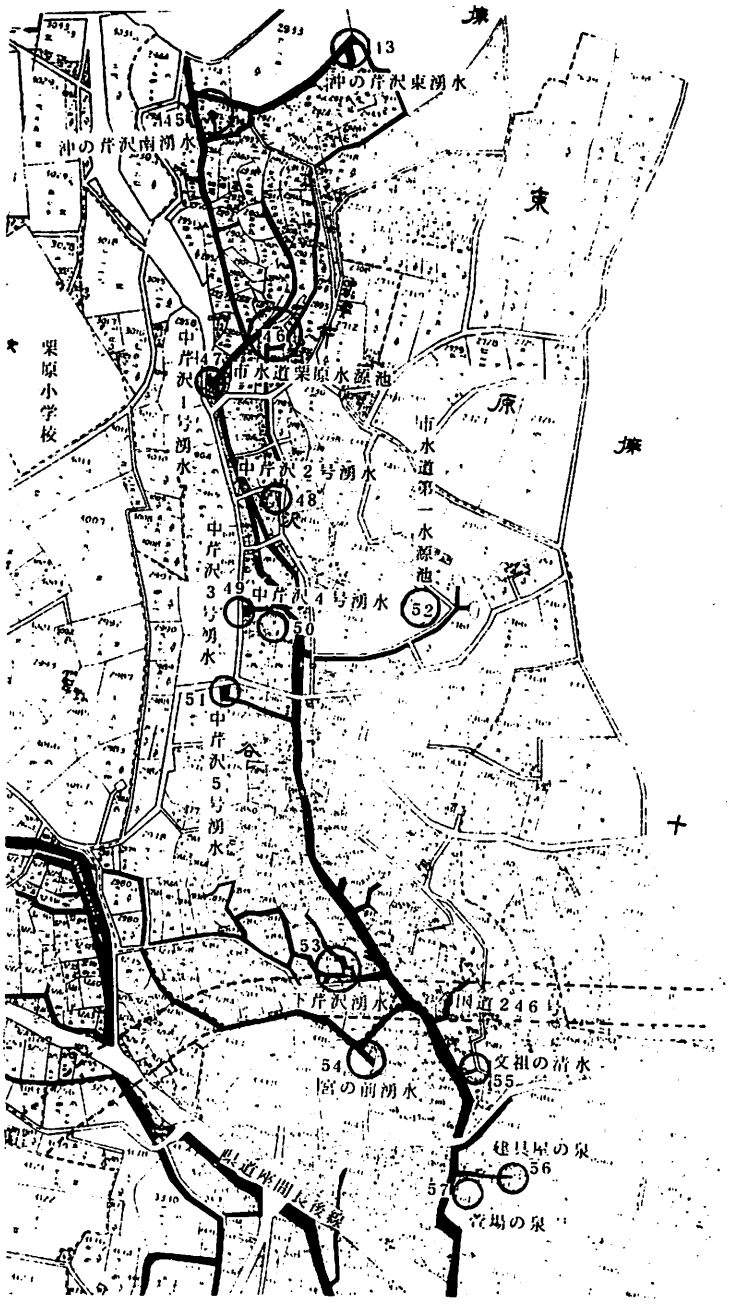
芹沢川の源は東老場と西老場の湧水であって、それが大矢菊次郎氏宅の南側で合流し、一本の流れになっている。この合流点一帯（栗原二九三五番地外）からも湧水し、川の中に入ると、足裏が押し上げられるほどの勢いで湧出していたという。

現在は東西の老場からの流水は僅かなものである。東老場は市営水道に、西老場は座間基地用水道に汲み上げられているためである。清流に繁茂するイジン芹が、昔は川一面に生え、水面が見えないほどで、地名の如く全くの芹の沢であった。現在は芹沢川が目久尻川へ合流するまでの水量は、三分の一である。

また栗原の西側を流れ、中村（中栗原）を通って芹沢川に合流している小池川も、水量は半分くらいに減少していると思われるが、これも水道の水の汲み上げが原因である。

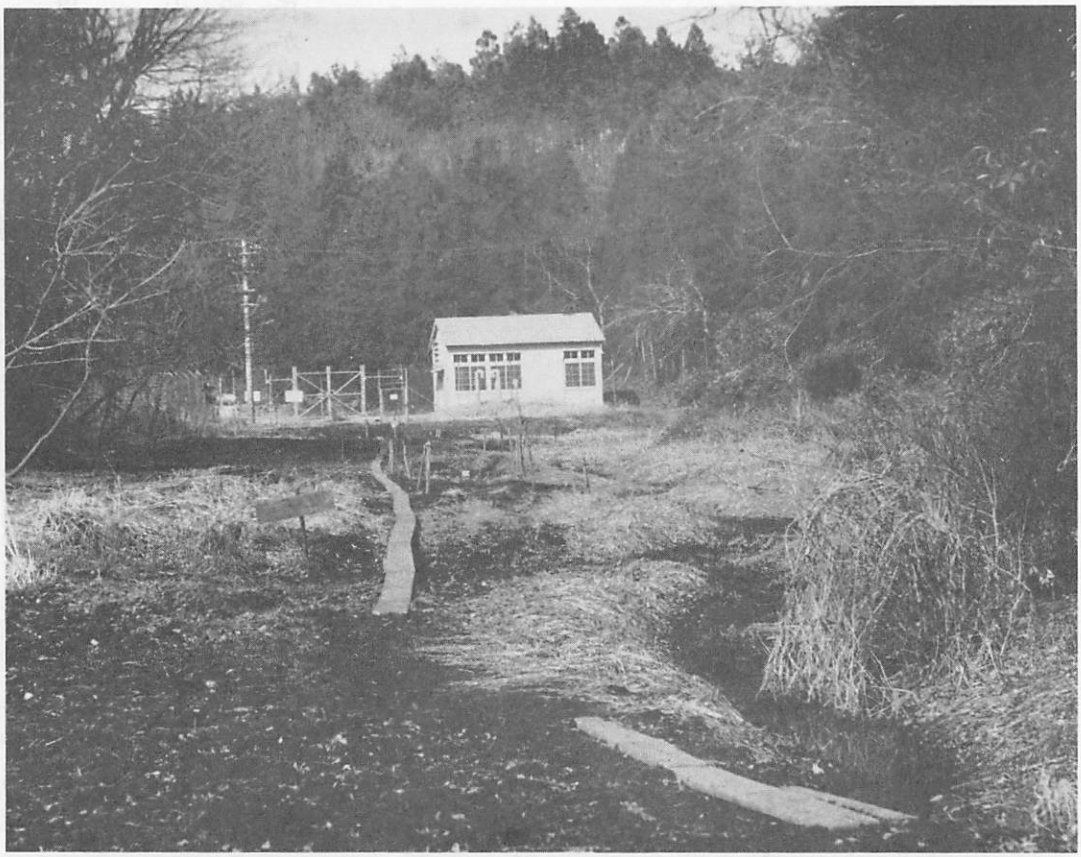
目久尻川水系の水道の水の汲み上げは、昭和十二年から始まっている。同年座間に設置された陸軍士官学校では、敷地内の井戸では必要な水量が得られず、上栗原に水源井を掘り（栗原四八九六番地外）、径三百ミリメートルの送水管が埋設されたという。其の後、施設拡張によって水不足となり、昭和十八年秋、芹沢地区に第二の水源を求めたと、小俣国栄氏が座間むかしむかし第四集に書いておられる。

第15図　芹沢谷・文祖の湧水



この第二水源として白羽の矢が立てられたのが、芹沢の西老場の最奥の湧水で、湧水地の真中に井戸が掘られ、送水された。

第二次大戦後、陸軍士官学校跡には米軍が駐留した



西老場　中央の建物は座間基地水道第二水源地（西老場第一水源地）。湿地の面影が残っている。水道の汲み上げが多いと水溜りは消える　56．2撮

ために水の使用量が膨大になったので、昭和三十年、更に第三水源井を、西老場の第二水源の下流約百五十メートル（栗原二四二〇番地外）に掘り、第二水源井と太い鉄管で接続した。

この第三号井戸（西老場第二水源地）を堀るには、位置の決定には芹沢の大矢菊次郎氏が相談を受けられたそうで、曽我光治氏が工事の請負いをされたが、大変な難工事であったといわれる。

次に、年代が前後してしまうが、昭和十六年、海軍厚木航空隊への送水のため、現在の市営水道第一水源池のところ（栗原二七六一番地、同二七五五番地）のヤワラに、井戸が掘られたのである。ここのヤワラの湧水量は大変豊かで、昔から不動明王が祭られていて、今も市営水道第一水源池の敷地の中にその像は安置されている。

そして昭和十七年、沖芹沢の一本松の下のヤワラ（栗原二八九四番地他）に、井戸を堀った。この井戸は深さ約五・五メートル、直径七・〇メートルである。これは湧水の勢いが余りにも強く、井戸枠を作り、コンクリートを打ちながら、徐々

市水道第一水源池　井戸は建物の内部にある。ここから立野台の配水場へ送水する　55．7撮

に沈めてゆく工法で、これも大変な難工事であったと聞く。このコンクリートの井戸枠には、四方八方に孔を開けてあり、周囲全部から湧水が入るように造られている。これが現在の市営水道栗原水源池である。

上流の二号井戸と下流の一号井戸との距離は、直線でも二百メートルあるが、これも鉄管によって接続されている。この二つの施設から海軍の厚木航空隊、第一、第二航空隊、高座海軍航空廠、等に送水されていた。

これらの水道施設は第二次大戦後、大塚水道協同組合、神奈川県企業庁水道局、座間町営水道等に管理運営が分割され、その後いろいろと移り変りがあり、現在はすべて座間市水道部の管理で運営されている。

第二次大戦後、この豊富な芹沢の湧水を利用し、昭和三十三年三月、大矢菊次郎氏が自宅の南側の田圃約六百坪を養魚場にした。当時、県の水産部によると、水温、水質ともニジマスの養殖に最も適しており、大いに期待されて開業したのであった。養魚

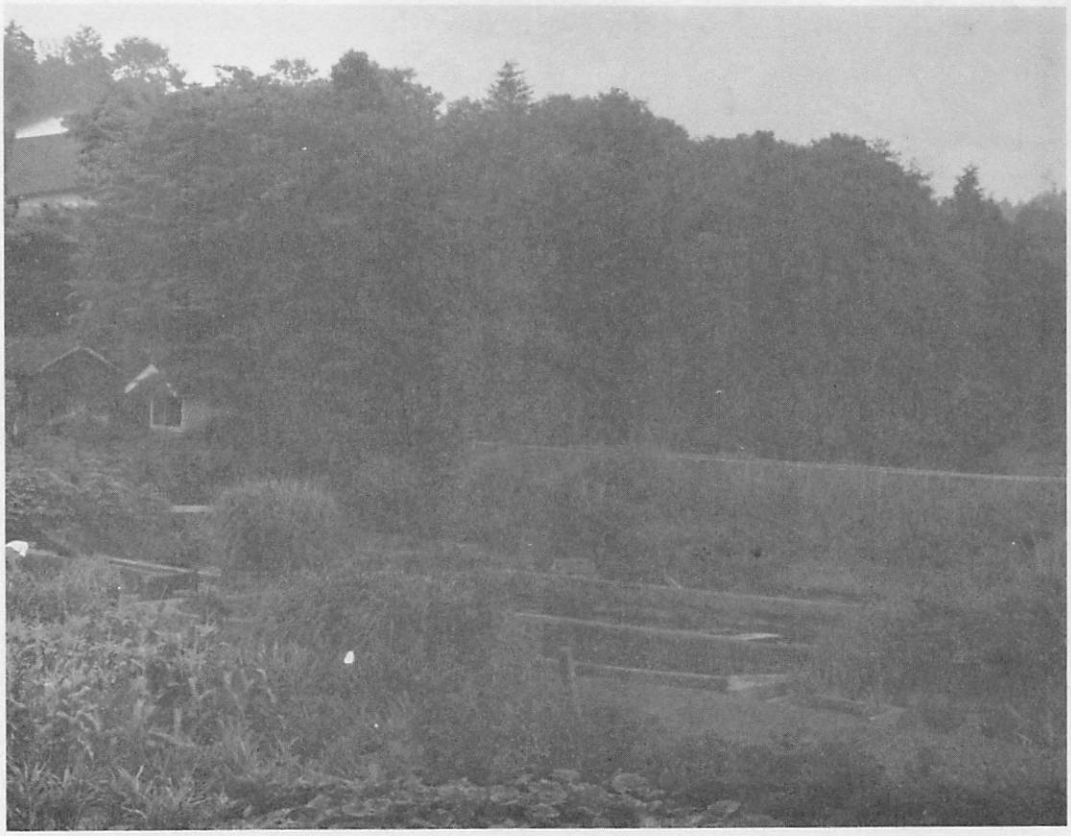
市水道栗原水源池　この周辺は埋め立てて公園化されようとしている。前方の森は市内ではほとんどここだけの準原生林　55．7 撮

場への入水は自然流水法であった。魚の発育も良好なので、第二の養魚場を、現在の栗原駐在所の東裏の田圃約九百坪を買い、これも自然流水法にして開設した。

参考までに、当時の土地の買収費は坪三千円、工事費は坪四万円で、工事費が土地買収費の十三倍強であった。湧水の勢が強く、工事費からみても、難工事であったことがわかる。

両養魚場とも魚の発育は良好であったが、丁度開設四年目を迎えた昭和三十六年に、自宅の傍の第一養魚場に思いも寄らない事態が起きた。県企業庁水道局が設備を拡大し、二ヶ所の井戸を設置し、揚水ポンプを始動させ始めてから、急に養魚場の水位がひどく低下し、半分に減ってしまう。そこで原因を調査するため、ポンプを停止すると、また定水位へ戻る。始動すると、たちまち半分になる。何回もテストを繰り返えし、原因の事実を突き止めたのである。

この原因がはっきりしてから、損害の賠償請求その他で、再三再四、県当局と交渉を繰り返し、ようやく二年目にして、昭和三十八年県当局の責任において、養魚場地帯を買い取ることに決まったのである。



沖芹沢南湧水跡　コンクリート枠が養魚場の跡　55.7撮

この後昭和四十二年に市営水道第二水源池が東老場（栗原二六三一番地）に掘られた。そして、芹沢谷一帯の湧水量は、現在のような状況になってしまったのである。

こうした事実から考えるとき、芹沢の湧水の減少したのは、湧水の上流方向である、座間、大和、相模原地区に多くの工場が進出して、多数の井戸が深く掘られ、多量の水が汲み上げられてしまうのにも、一つの原因があると思われる。

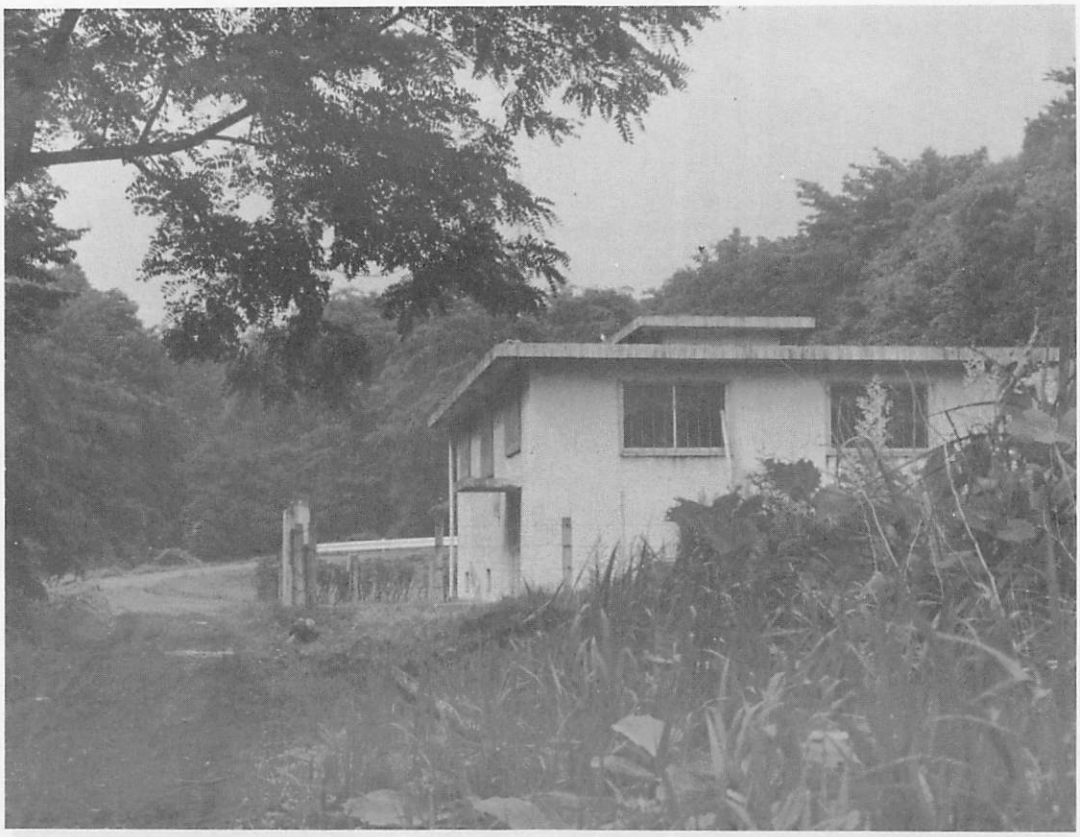
補　遺

芹沢谷には、これらのほか数多くの湧水があったが、それらは現在はほとんど枯れてしまっている。そこで、ここでは簡単に取り上げておく。

(一)　沖芹沢の湧水

（芹沢谷が東西の老場の谷に分れるあたりを、沖芹沢と通称している。奥芹沢の意である。）

沖芹沢の主要な湧水地は、ほかに、次の二箇所がある。他に小量の湧水地は各所にあったようであるが、



東老場　建物は市水道第二水源池。かつて水田だったところも木が生い茂っている　55．7 撮

地点は特定できない。

(1)　沖芹沢東湧水　㊸栗原二九二八番地地先

（地先とは「そのあたり」の意で、水路敷に湧くものである）

(2)　沖芹沢西湧水　㊺栗原二四四七番地

(1)のあたりは現在は杉などが生い茂っており、夏季には薄暗いほどで、かつてを知る者以外には、全くわからない。

(2)には井戸が掘ってある。これは前記の大矢菊次郎氏が養魚場へ水を補充するために掘られたもので、現在は井戸には蓋がしてあって、防火用ともされ、市水道部の管理下にあり、多少は湧出している。

井戸が掘られる前までは附近の人々の生活用水とされていて、大正末年までは飲料のほか、風呂の水としても汲んでいたという。

(二)　中芹沢の湧水

（「中芹沢」という呼称はないが、芹沢の中央部という意味で用いる）

芹沢中央部で代表的な湧水は市水道第一水源池であるが、かつては次のようなところにも湧水があった。現在それらは跡形もないが、以下に記録しておく。

(1) ㊼栗原二九五九番地地先
(2) ㊽栗原二八七九番地
(3) ㊾栗原二八六六番地地先
(4) ㊿栗原二八六八番地地先

芹沢川の源流（西老場）地点を特定しがたい湧水の集った流れ
水道使用量の少い冬季に却ってこのような流れが見られ、夏は枯れる　56.2 撮

(5) 51栗原二六六一番地地先

右の湧水のおよその位置は、現在の芹沢橋の上流約二百メートルほどまでの間であり、後述の水車などは数十メートル上流の処にあった。

これらは皆附近住民の生活用水として利用されており、五十年ほど前までは、芹沢には井戸の無い家も相当に

あった。

芹沢谷における湧水の特異な利用は、水車を回して動力源としたことである。水車には湧水が必要なわけではないが、もし芹沢の湧水が豊富でなかったら、水車はできなかったろう。

栗原二八八一番地地先で芹沢川を堰き止めて、東側の水路へ導入し、栗原二八七五番地に水車小屋を建てて精穀をし、またその動力を利用して、同番地に揚げ枠所が作られ、水路を隔てた西隣には、やはり水車の動力で生糸製糸工場（十五人取り）ができ、また揚げ枠所の隣には繭乾燥場なども作られた。もっともこれらは大正年間のことであり、産業に関することなので、これくらいで止めるが、要するに芹沢の湧水は特異な利用をされていたのである。

そのほか、栗原二八六四番地地先の川の中には湧水があり、そのあたりの川巾は特に広く、芹沢集落の雨乞いの場所とされていた。

以上補遺については、芹沢の市化財保護委員大沢清氏に御教示をいただいたことを申し添える。

十、いっぺ窪の湧水

見上昭二

所在地

(1) ⑲いっぺ窪東湧水（A地点）栗原三六八七番地　大矢太市氏方

(2) ⑳いっぺ窪西湧水（B地点）栗原三六八六番地　大矢正松氏方

(3) ㉑いっぺ窪南湧水（C・D・E・F・G地点）栗原三六八八番地　白井氏所有地

水温　　未調査　(1)、(2)、(3)とも)
湧水量　未調査　(1)、(2)、(3)とも)

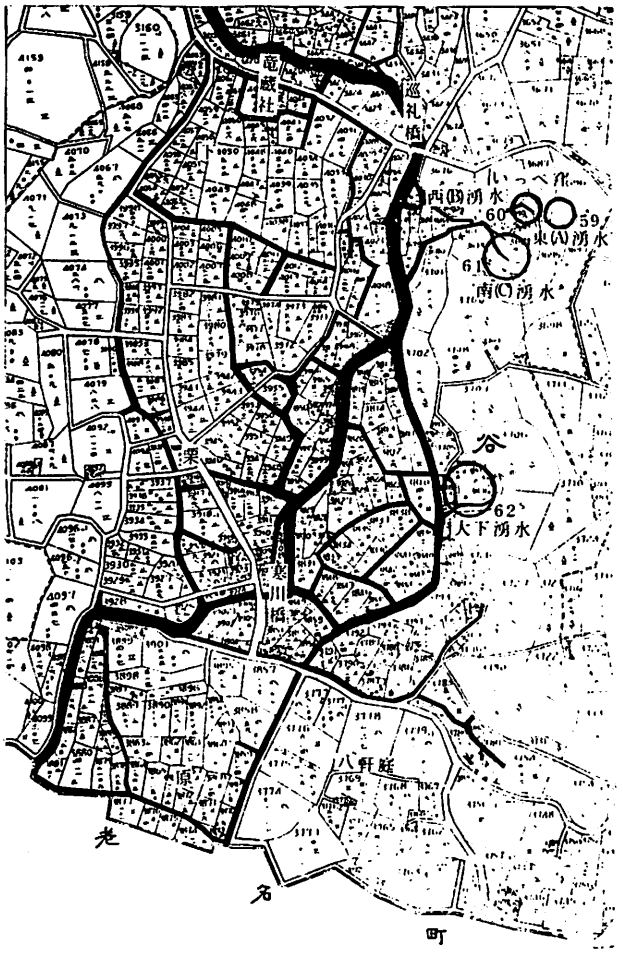
いつぺ窪の湧水は東原台地上の県道座間長後線より西方へ巡礼街道を約百メートル入ると急な坂があるが、この急坂を下ったところの左手の向う側の崖下にある。巡礼街道にはこの西方約百メートルの所に目久尻川の橋がある。

このいつぺ窪には大矢太市氏、大矢竹松氏、加藤博行氏の三戸の人が住んでおられ、湧水へ行くにはどちらかの宅地内を通らなければならない。三氏の屋敷と奥の山とに囲まれていて、人目につかない場所である。

まずいつぺ窪の地名について書く。いつぺ窪は、人によっては「いつぺい窪」とか「いつぺん窪」とか言い、漢字でもどう書くのか一定していない。「いつぺ窪」や「いつぺい窪」に対しては、この地の発音に従えば、①一拝窪、②一杯窪、などが当てられ、「いつぺん窪」には「一遍窪」が当てられる。

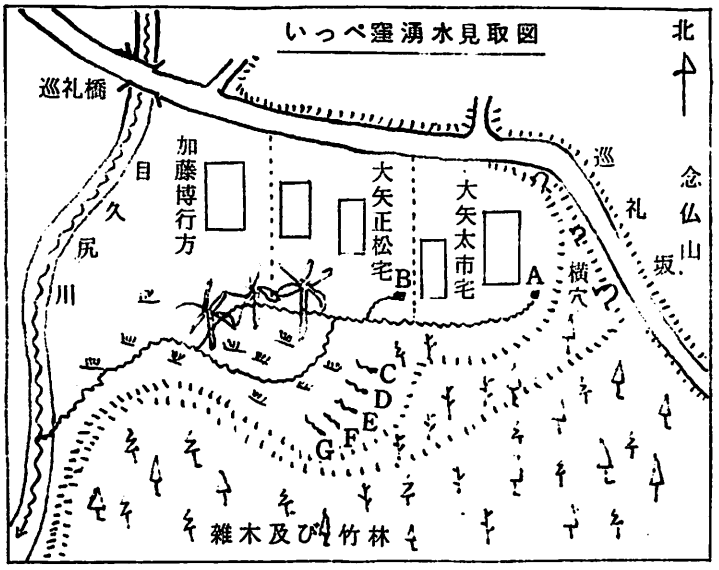
私の勝手な解釈を書いてみる。①一拝窪とすれば、巡礼街道の崖上には念仏山というところがあり、ここにはお寺かお堂が建っていたと言われているので、巡礼達がそこへ立寄って拝み、それから崖下の湧水で一息入れたのではないか。②一杯窪とすれば、鎌倉や江戸方面から星の谷観音堂へと行く巡礼達がこの巡礼街道を通るが、相模野を越えてくるため、途中どこにも湧水

第16図　いつぺ窪・大下の湧水



がない。そこで「いつぺ窪」にたどり着き、一杯の清水を飲んで喉を潤す。ほっと一息、休息をする所としての一杯窪。③一遍窪とすれば、一遍上人が念仏山にあったお堂に何日が泊まって寝起きしておられ、朝に夕に崖を下って、泉で身を清めるのやその他に利用しておられたのではないか。などと考えられる。この一遍上人の話はなにか言葉のこじつけのようですが、ずっと以前老人から聞いているので、ここに書き留めておくわけである。

この地名については、たまたま親戚の法事のとき、大矢正松老が上栗原の崇福寺の先代のお坊さんと、次のような話をしていられるのを聞いたことがある。「大矢さん、お宅のとこのいっぺ窪という名、どういうことで付けられているか、誰かから聞かれているかねー」「いやー、いつぺ窪のことで、どんな字を書くんだかよく聞かれるが、自分の生まれた場所でも、親からもそのことについてなんにも聞いたことはねえ」「わしが調べてみたのには、巡礼者がやっと座間に入り、目的地がもうすぐ近くだ、ここで一休みしよう、とほっとして、一杯の水を頂き、それで名が付いたのだと思うな」というのであった。地元でもその程度のことしか言っていないのである。



巡礼街道は江戸時代の末までは、崖の急斜面をそのまま下って、前記の三戸の屋敷の南側を通っていたというので、湧水は街道からよく見えていたのであろう。そして巡礼に限らず、ここを通る者はみな、この湧水を汲んで飲んだものであろう。

現在、いつぺ窪の湧水は大矢太市氏の屋敷と大矢正松氏の屋敷とのほか下溝（相模原市）の白井氏の所有地より湧出しており、この湧水を利用したのが白井氏である。

もとは白井氏の所有地は田圃であったが、水が冷えすぎて、稲がよくで

いっぺ窪西Ⓑ湧水　水洗い場。前方の石の下より湧く　55.7撮

きなかった。そこに白井氏が目をつけて、土地を買い受けてわさび田を作ったのだという。わさび田を造成するには、湧水の流れを利用して田圃の土を徐々に洗い流し、砂利の層まで土を取り除いたのだが、土の厚さは約一尺ほどだった。大変手間のかかる仕事で、大矢正松氏の物置小屋を一時借り、そこに寝泊りして毎日仕事を続けていたという。そしてわさび田が完成すると、留守番の人を住まわせる小屋を傍に建てた。わさびは初めから成績がよく、良質なものが収穫されたという。

現在の湧水地点は、前頁の図のA地点（大矢太市氏宅地内）、B地点（大矢正松氏宅地内）、東南の崖のC、D、E、F、Gの各地点（白井氏所有地）である。

湧水は広い範囲に流れているので、あまり水量を感じないが、少し下り、集って小川となって流れる量は相当な量である。約七十メートル先きで、この小川は目久尻川へ流れ込んでいる。

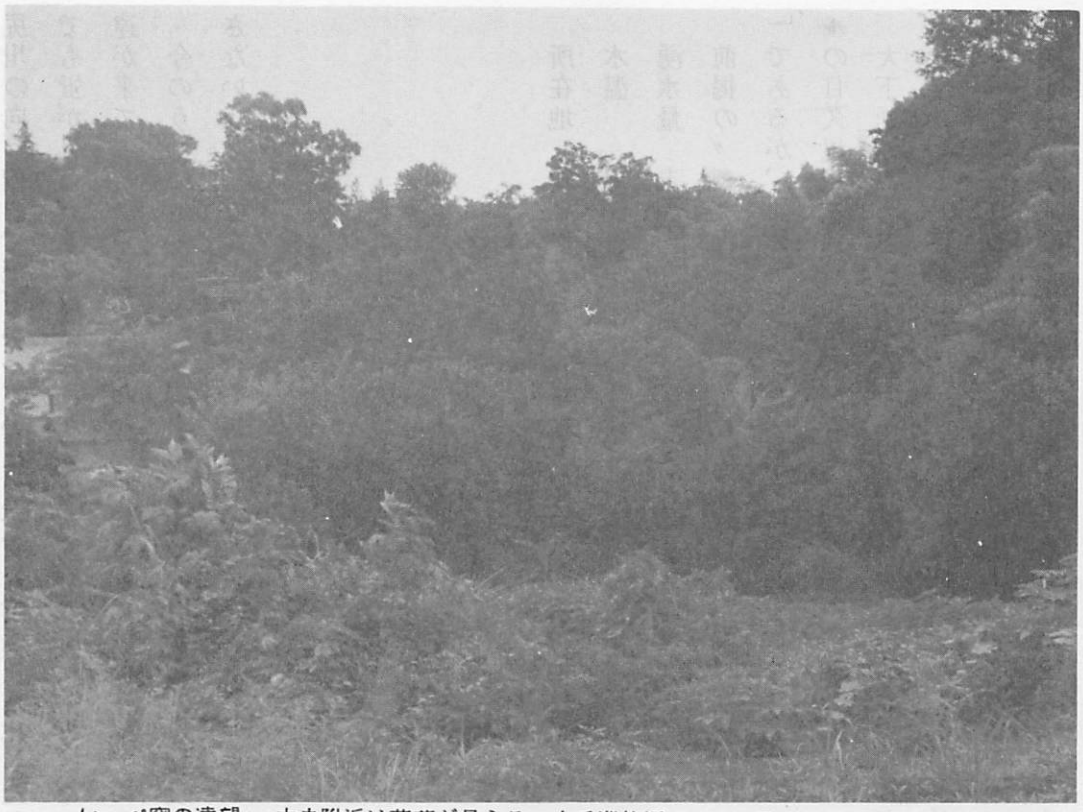
六月、梅雨期から湧水量は急に増し、それから十月頃まで、宅地内の各所から噴き上げる程で、庭に溝を掘って流さなければならない程の量だといわれる。大矢太市氏宅の掘り抜き井戸は、高さ二尺（六十センチ）のコンクリート

の枠が三本入っており、常に一定の水位だが、梅雨期には其の井戸枠から水が溢れ出ることもあるという。また裏の方の溝から湧水の流れる音が聞えるのも、この時期だそうである。夏季は湧水の冷気が家の中まで吹き込んでくるそうである。

大正十二年の関東大地震の際にも、湧水には何の変化もなく、屋敷内の一部が地割れした程度で、当時井戸は竹を編んだ筒を枠にしていたが崩れもしなかったそうだ。

このいっぺ窪の周囲の台地上には、かなり広く濃く、主に縄文中期の土器片が見出される。また巡礼坂には、千二、三百年前に造られたものと言われる横穴（おおけつ）（古墳）が幾つか残っている。（市文化財調査報告〃蟹ヶ沢鈴鹿遺跡〃参照）十数年以前はこの湧水地には無数の土器片や石器などが散乱していたという。（同書参照）恐らくこの湧水が縄文時代人や古代の人々を、この地に引きつけたものであろう。長く生活用水として、歴史時代を通じて用いられて来たも

いっぺ窪南湧水　わさび田の跡。湧水地点は散在　55．7撮



いつぺ窪の遠望　中央附近は芭蕉が見える。右手巡礼坂　55. 7撮

のであろう。

文化財保護委員の鈴木芳夫氏も、むかしむかし第四集に書かれていたように、縄文遺跡と云わず、念仏山なども是非詳しく調査してみたいものである。

現在この湧水地の中には芹が一杯に生え、その香りがなんとも言えずなつかしい。又芭蕉が十数本生えている。直径十五センチから二十センチくらいの太さで、高さは七メートルくらいあり、大きな葉を広げており、その下に立つとひんやりした風が吹いてきて、別天地に来たような風情がある。芭蕉が実を結んだときはモンキーバナナと同じようで、其の下に立つと、ここはどこだろうと、錯覚をおこす。

いつぺ窪湧水は人目にあまりつかない場所だけに、荒れてはいるが、昔のままのように思う。もし手を加えて整備すれば、もとのわさび田の時のような泉にかえるだろう。

最近日曜日などには、子供達が沢蟹捕りなどに遊びにくるので、湧水個所のあたりが削り取られ、掘り起されているところが各所に見られる。毎年六月から七月にかけて、蛍が相当数見られる。昔はいつぺ窪の泉から目久

尻川の向う側まで飛びかっていたのが、今では下水化した目久尻川までは、絶対に飛んで行かないそうである。座間市内でも蛍が見られるのは限られた場所、湧水の所だけではないだろうか。今年はどの程度の数の蛍が見られるか。ただ子供達が来て、遊び荒してしまわないか、それだけが心配である。

今のうちに地主さんの協力を得て、この素晴らしい環境をこわさないよう、また座間市の貴重な財産である湧水を涸らさないよう、なんとか保全してもらいたいと考える。

十一、大下の湧水

見上昭二

所在地　㊀栗原三八〇六番地・同三八〇八番地外

水温　未調査

湧水量　未調査

前掲の〝蟹ケ沢　鈴鹿遺跡〟によれば、いつぺ窪湧水は「下谷泉（しもや）」と呼ばれているようである。地籍上は確かに「下谷」であるが、通称から言うと「中下（ちゅうしも）」にある。この大下（おおしも）の湧水はこのいつぺ窪湧水の南方約百五十メートルの目久尻川左岸の崖下で、電々公社社宅の西側である。

大下湧水のもとの湧水個所は現在すっかり埋め立てられているので、全くわからない。その埋立てのとき、湧水の流路にコンクリート管が二方に分れて埋められ、それから湧水が流出しているだけである。一方は丸福養魚場内と海老名市柏ケ谷方面に流れる小川に、もう一方は崖下を北の方へ回って田圃の方に、流出していた。最近調査すると、その流出口の前には土のうを積み重ね、水が堰き止められていた。湧水はどこかに流出しているはずと、調べてみると、大下湧水前の

大下の湧水Ⅰ　わさび田の跡。左手を「大下の湧水Ⅱ」の下水管が通っている　55.7撮

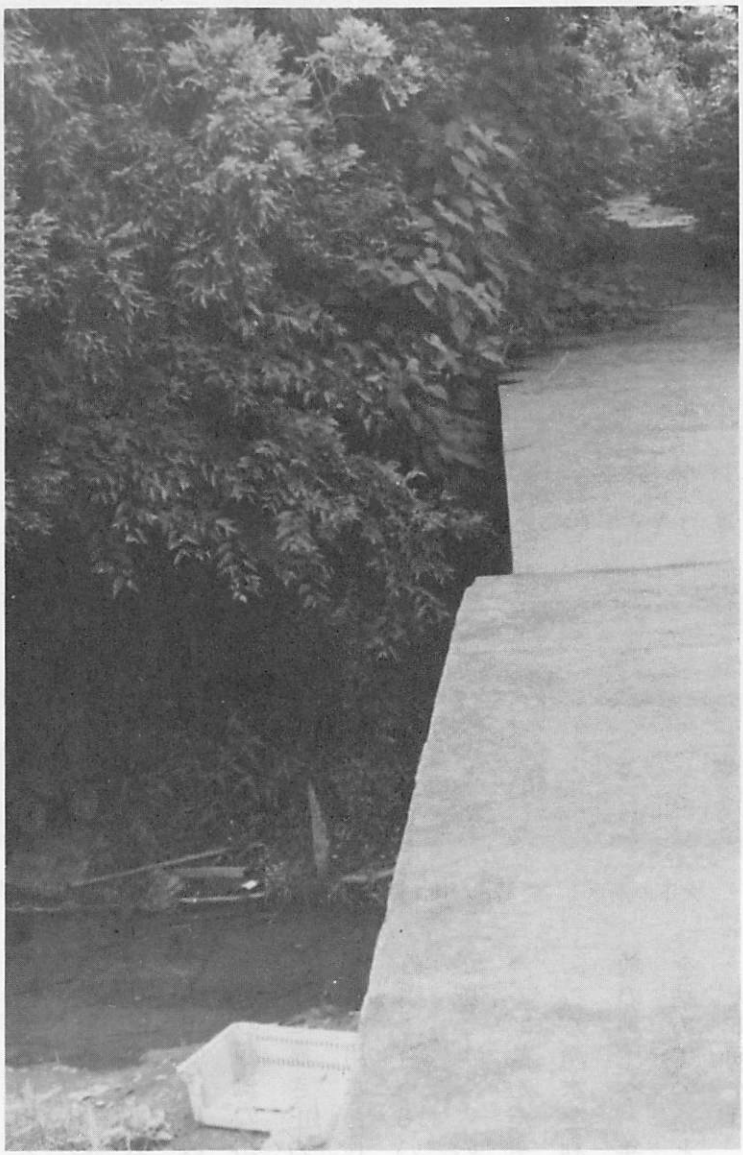
分譲地内の道路の側のU字溝へ流れこんでいるのと、地下壕利用の汚水の集合流出露出管の北側より流出しているのとがわかった。どうして水口が堰き止められたかは、この終りの項で説明する。

大下湧水地の中で最も多く湧出していたのは、崖面が凹入した奥で、湧水は前の小川に流出し、南西の海老名市柏ヶ谷方面と北方へ向うものとに分れ、北方に向うものは崖下を少し流れて小川に流出し、一部は桧の丸太を二つ割りにし中を刳り抜いたものを小川の上に渡し、小川の西側の溝へ流していた。小川の西側の田圃は高くて、すぐ近くの柏ヶ谷堰を一杯に堰き止めても水がかからなかったので、大下湧水を用水としていたのである。この樋は小川に架る橋に沿っていた。子供の頃、川に遊びに行って喉が乾くと、この二つ割りの丸太に流れる湧水をすくっては飲んだものである。

この湧水を利用する西側の田圃の耕作者は、湧水地の地主へ、年貢米として、年間一反当り玄米五升を納めていたという。

大下湧水は、所有者の大矢茂さんが第二次大戦の

応召で、昭和十九年六月に出発するまでは、まだ変りなく流れていた。しかし応召後間もなく、高座海軍航空廠の地下工場建設のため、其の出入口が崖面に掘られ、其の排土で大下湧水地の所は全部埋め立てられてしまった。その時の軍の契約書の内容は字が薄くて判読できないほどであるが、百二十九円の金額が記載され、年間か永久かは不明である。



大下の湧水Ⅱ　現在は左下の池の中に湧いている。
前頁の写真はこの写真の奥、コンクリート管は
下水で目久尻川へ排出している　55 7 撮

湧水の囲りには直径三十センチ程の杉の木が多数生えていたが、それも全部切り取られ、地下工場の出入口の保強材料として、皆使用されていたという。軍の埋め立てがされた時、湧水の流路にはコンクリート管が布設され、それより流出していたのは前に述べた通りである。

昭和三十年代になって、台地上が開発されてくると、大雨が地下壕の中へ流れ入り、地下壕の出入口から大量の雨水が噴出し、その付近の住宅に危険が迫ることがたびたびあったので、昭和四十四年頃、堤防工事が行われている間に、大下

湧水の流出口であるコンクリート管の開口部も塞がれてしまったのである。これが大下湧水の現状である。

この湧水地の面積は約三百坪あるが、そのうち二百十坪ほどが八軒庭の大矢茂さんの所有地で、残りの九十坪ほどが故大矢栄氏の所有地である。大矢茂氏に聞くと、現在七十一才の同氏が物心が付いた時には既に、この湧水地はわさび田だったと言うので、わさび田としては相当古いものと思われる。同氏の父親の故滝蔵氏の頃、下溝の白井氏にいつぺ窪のわさび田と同じように貸しておられるが、当時の貸料は不明である。

この大矢茂氏の土地のわさび田は成績がよく、良質な三寸わさびが、必ずというほどよく収穫されたという。四月頃苗を植え、翌年二月に取り入れて出荷された。品質が上等であったので、座間の栗原でとれても、伊豆のわさびで売り出されていたが、出荷先きは不明である。

このわさび田も、茂氏の代になって、昭和六年頃より、当所の大矢靖治氏と故大矢資夫氏に貸し、両氏の共同事業として、引き続きわさびの栽培が行われたが、貸地料は全部で年間四十五円であった。当時付近の畑の一等地の貸地料が一反十円であり、二等地が七、八円であって、普通の貸地料の約五倍であった。両氏の出荷されたのは横須賀方面であって、やはり伊豆のわさびとして売っていたという。栗原で収穫されたわさびが伊豆名産として通用したのは、それが最も良質なわさびであったことを証明している。

わさびの根は三寸（十センチ）が出荷期であり、一坪で八十本収穫できれば上等で、高い借地料でも採算が取れたという。しかし高価に売れるだけに、作業が大変で、まず根植えには、玉石を上流より手もとに引き寄せ、砂を洗い流しながら作業をする。道具は鉄製の釣り針型の頑丈なもので、柄は六尺の長さで、鍬の柄と同じくらいの太さである。わさびは根に砂がからまると生育しないとまで言われ、なかなかむずかしい植物である。玉石を碁盤の目のように平らに並べ、わさび根に八方から平均に水が回るようにしないと、駄目だと言う。

大矢茂氏のわさび田が成績が良かったので、隣の故大矢栄氏の所有地にもわさび田を作って、玉石を相模川から運んで植えたところ、生育が悪く、思うようにならなかったそうである。やはりその湧水になじんだその場の玉石でなければ駄

大下の湧水地の遠望　中央の人家の後ろの森の中。かつてを知る者以外にはわからない　55. 7 撮

目であると、大矢茂さんは語っておられたが、清流でなければ育たないものだけに感じるものがあった。

なお、この湧水の東側台地上の電々公社社宅の建設工事の時には勝坂式の住居跡が発見されているし、この泉も当然縄文時代より、人間が利用して来たものと考えられる。

※

終りに、今回の調査に当って、大矢茂氏、大矢太市氏、大矢正松氏、大矢菊次郎氏等の御親切な協力を頂いたことに、厚く御礼申し上げます。不十分な点はまた各方面の御協力を得て補充してゆきたいと思います。

十二、文祖の湧水・その他

鈴木芳夫

所在地

(1) ⑭宮の前の湧水　栗原三三一五番地地先

(2) ⑮文祖の清水　栗原三五八一番地

(3) ⑯建具屋の泉　栗原三五六一番地

(4) ⑰萱場の泉　栗原三五五九番地

(2)、(3)、(4)はいずれも個人の宅地内にあり、無断で立ち入ることはできない。前に出ているいつぺ窪の湧水にくらべれば、むしろ「文祖の湧水」にすべきかとも思われるが、ここでは分けて記述する。次の二項目は(2)(3)(4)に共通している。)

水温　未調査

湧水量　未調査　ただし(1)を除く湧水とも、見たところではほぼ同量である。

(一)　宮の前の湧水

(「その他」の方が先きになってしまうが、都合により、順序を変える)

県道座間長後線から文祖坂への市道が分れるところの北方の大矢健さんの屋敷に接してあった。

大矢菊次郎さんの第二養魚場の水が枯れてしまった後(四八頁)、付近は埋立てられて、宅地が造成された。この湧水も同様な運命をたどり、埋立てられてしまった。それ以前は「鮒堀」という中栗原から流れてくる用水を伝わって、目久尻川へ流出していた。

なお大矢さん方には、現在市内には珍らしい井戸があり、自家水道を設備されている。

その井戸は浅かったので、周辺で土木工事があり、多量の水抜きをすると枯れてしまうため、思い切って八メートル程掘り下げたところ、それからはどんな工事があっても水が枯れず、すぐ北側を通る国道二四六号の陸橋の橋脚の基礎工事の時、文祖の湧水(後述)などは枯れてしまったが、この井戸だけは枯れなかったという。

右は大矢健さんのお話である。

(二)　文祖の清水

県道座間長後線から文祖坂へ上ってゆく市道の北側の大矢静子さんの屋敷の南西のコンクリートの土留めの下から湧き、約十メートルの水路で芹沢川へ流出している。

大矢さんの家は「シミズ」と通称されている。昔から清水の湧く処として知られていたのであろう。現在の湧水の状況は前記の通りであるが、家屋の床下には水抜きの管を埋めておいても、湿気が強く、床板は特に厚くしてある。しかしそれでも畳の傷むのが早いという。

湧水は現在は汚れたものを洗うのに使う程度である。

右は大矢静子さんよりの聞き取りである。

(三)　建具屋の泉

大矢静子さんの家よりは市道を隔てた南側で、大矢忠蔵さんの庭先きにあるが、庭よりは約一メートル低い。「たてごや＝建具屋」とは大矢忠蔵さん方の通称である。

湧水量は昔とあまり違わないし、季節的にも変化は少い。しかし昭和四十六年前記国道の陸橋の橋脚を立てるため、百メートルほど北西西方へ穴を掘ってポンプで水を汲み上げた時は、一週間ばかり湧出が止ってしまった。汲み上げをやめると、湧出は元へ戻ったが、これは隣の大矢静子さんの湧水も同様であった。

第二次大戦中、湧水地点のすぐ鼻先きの崖面へ高座海軍航空廠の地下壕が掘られ、その排土で埋め立てたため、地形は変ってしまっているが、その以前は湧水地点と同じ高さの三百平方メートルくらいのところで、一面に石菖が生えた「やわら（湿地）」だった。

沢蟹がたくさんいて、捕っては天ぷらにしてよく食べた。今でも多少いるが、大和市の林間あたりから子供達が来て、目久尻川の方からはいりこんで、水路の両岸を掘り崩しては捕えるので、困っている。

文祖の湧水の流れ　このように流れて目久尻川へそそいでいる。防空壕の排土で埋るまでは、左側にも一面に石菖が生えていた　56.2撮

昔は食器も洗ったので、食べ物の残りかすを食べに来るのか、芹沢川から「モクタ蟹」がよく上って来た。ウナギはどうかするといた。その他、カワニナが多かったが、戦後農薬が流入したためか、ほとんどいなくなってしまった。そのため、戦前は籔が明るくなるほどいた蛍は、全く絶滅してしまった。

わさびは芹沢川の近くの方で、第二次大戦前に栽培した人もあったが、当時、周囲は深い孟宗竹の籔で、落葉が多く、それを掃除しきれなかったためか、水が汚れて、あまりうまくゆかなかったらしい。

以上は大矢忠蔵さん（八十才）の話である。

(四)　萱場の泉

通称カヤバで知られる中村覚さんの裏手の崖下にあるので、「萱場の泉」と呼ばれている。(三)と同じ平面にあり、芹沢川への流出口は(三)と同じである。

ここも前記の地下壕の土で埋め立てられ、

地形は変っているが、まだ二百平方メートルくらいの湿地が残り、石菖がたくさん生えていて、一部は浅い池となっている。もとは水田であって、わさびを作ったこともあった。はっきりした湧水地点以外にも水が滲む処があるらしい。湧水が多かった頃には池ももっと広くて、夏には子供達が泳いで遊んだ。

以上は中村覚さんのお話によります。

おわりに

以上で市内の湧水についての調査報告を終えるが、調査もれもあるかも知れないし、調査も完全とは言えないであろう。そして多人数で調査したので、報告書の書き方もまちまちになり、読み難い点も多いかも知れない。それらの御期待に副い得なかったことは、深くお詫び申し上げる次第である。

結論として言えることは、市内の湧水は、水道水源として利用されているものは別として、涸渇寸前にある、と言うことである。身近かな処だけを見ているのではそれ程にも感じないが、市内全般を見渡す時、自然破壊の限度に来た感じを深くするのである。そして泉水の湧水の涸渇の原因が旧陸軍士官学校の移転であることを考えれば、市水道の水源である湧水の運命がしみじみと思われるのである。

拙いながらもこの一書が、市民各位の市内湧水に対する理解を深められる一助ともなれば、まことに幸いと考えるものである。

執筆者紹介

赤石智子

井上収一

大谷之彦

小俣国栄

鈴木芳夫

見上昭二

昭和五十六年三月十五日印刷
昭和五十六年三月二十日発行

神奈川県文化財調査報告第六 ◎

座間の湧水

昭和五十四年調査

執筆 座間市文化財調査員会
監修・編集 座間市文化財保護委員会
発行 座間市教育委員会

印刷所 サン・タイプ
座間市相模台一七八―七〇一
電話 〇四二七―55―七二八三
発行所 座間市教育委員会
座間市座間二―二八八二
電話 〇四六二―55―三二三一